

綜 說

滿洲ノ結核問題

第18回日本結核病學會特別講演

南滿洲保養院長 遠 藤 繁 清

目 次

第1章 滿洲ニ於ケル結核蔓延狀況	第4章 滿洲ノ氣候風土ト結核ノ關係
第1節 結核死亡率	第1節 滿洲ノ氣象
第2節 結核罹病率	第2節 煤塵ノ問題
第3節 「ツベルクリン」反應陽性率	第3節 季節別結核死亡率
第4節 街路上喀痰検査成績	第4節 結核性疾患發病ト季節ノ關係
第5節 動物ニ於ケル結核	第5節 喀血ト季節ノ關係
第2章 滿洲開拓地ト結核	第5章 滿洲ニ於ケル結核蔓延ノ理由
第1節 青少年義勇隊ノ結核死亡率	第1節 傳染源ノ考察
第2節 青少年義勇隊ノ結核罹病率	第2節 發病動機ノ考察
第3節 青少年義勇隊ノ「ツベルクリン」反應陽性率	第6章 滿洲ニ於ケル結核治療
第4節 鐵道自警村ノ結核	第1節 大連ニ於ケル大氣療法
第3章 滿洲ニ於ケル結核ノ病型	第2節 他地方殊ニ北滿ニ於ケル大氣療法
第1節 肺結核ト其他ノ結核トノ比率	第7章 滿洲ノ結核對策
第2節 肺結核ノ病型	結 語

第1章 滿洲ニ於ケル結核蔓延狀況

第1節 結核死亡率

滿洲全土ノ統計ハ無ク、關東州及鐵道附屬地ノミデアルガ、關東局人口動態統計ニヨレバ、昭和12年度ノ各民族全體ノ人口1萬ニ對スル結核死亡率ハ關東州内 20.5、鐵道附屬地 16.0、合計 19.1デアツテ、日本内地同年ノ 19.3ト大差ガ無イ。

然ラバ在滿邦人ノミデハ如何ト云フニ、關東州 26.2、附屬地 18.8、合計 22.5、即チ日本内

地ヨリモ多イガ、内地ノ都市平均ヨリモ低イ。

然シ在滿邦人が結核ニ罹ル場合ハ内地ニ歸還スル者ガ多クアリ、而カモ其歸還者中多數ノ死亡者ガ出ルガ、之等ガ皆滿洲テ死亡シタトシテ死亡率ヲ推定スルコトハ、滿洲ト結核病トノ關係ヲ考察スル上ニ必要デアル。

嘗テ岩田氏ハ大正9—13年ノ滿鐵及道從事員肺結核死亡率ハ内地歸還退職後ノ死亡者數ヲ推定加算シテ 6.44%トナシ、日本内地ノ3倍ト報

第 1 表 滿洲ニ於ケル結核死亡率(昭和 12 年)

地域	人種	結核死亡 實數	人口 1 萬 = 付率
關 東 州	各人種	2411	20.5
	内地人	458	26.2
	滿人	1974	19.5
鐵 道 附 屬 地	各人種	893	16.0
	内地人	406	18.8
	滿人	427	13.8
合 計	各人種	3334	19.1
	内地人	864	22.5
	滿人	2401	16.7
大 連 市	各人種	1155	22.9
	内地人	417	26.7
	滿人	735	21.4
日 本	全國(昭和 12) 人口 10 萬以上		19.3
	都市(昭和 10)		24.2

告シタ。

其後自分ハ昭和 3—6 年ノ滿鐵共濟社員及家族ノ結核死亡率ヲ調査シ、内地歸還後ノ死亡者ヲ加ヘ、又退職後ノ死亡者ヲモ推定加算シタ結果、3.5%ト云フ率ヲ得タガ、之ハ其頃ノ内地結核死亡率ノ 1.8 倍ニ當ルト報告シタノデアル。

三浦氏モ大正 9—14 年ノ在滿邦人ノ結核死亡率ハ 10 歳未満ノ結核死亡率ガ内地ノ 2 倍内外ヲ示ス事實ガ滿洲ニ於ケル結核發生率ノ真相ヲ語ルモノダト論ジタ。

川人氏ハ大正 14—昭和 5 年ニ就テ、人口構成ヲ内地ト同一ニシテ訂正死亡率ヲ求メ、3.72%即チ内地ノ 1.8 倍ト斷ジタ。

其後山田、川人兩氏ハ昭和 6—10 年ノ在滿邦人ノ結核死亡率ヲ訂正算定シテ内地ノ 1.5 倍ト報告シタノデアル。

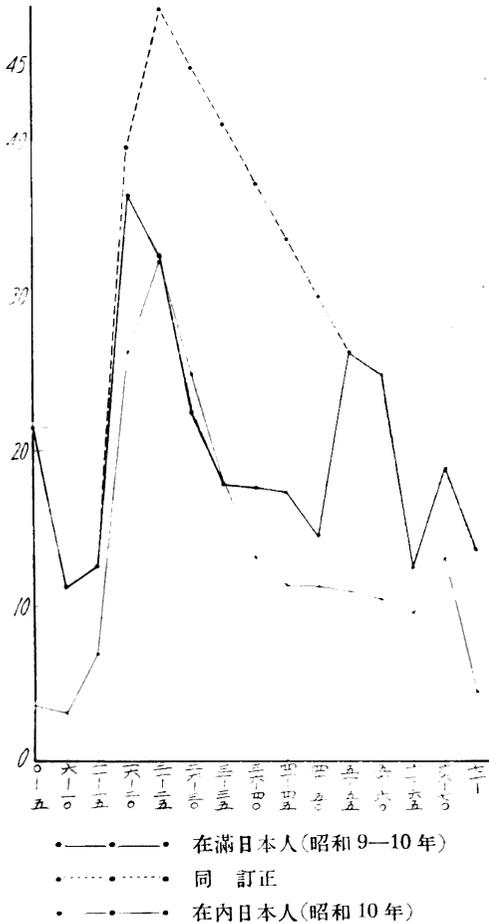
自分ハ今回大日本統計年鑑カラ算出シタ昭和 10 年内地年齢別結核死亡率ト、昭和 9—10 年在滿邦人ノ夫トヲ比較シテ見タガ、大體ニ於テ在滿邦人ノ方が内地ヨリ高率デアル。就中小兒ト老人ニ於テ高く、5 歳以下デハ内地ノ 6 倍、6—10 歳デ 3.6 倍、11—15 歳デ 1.8 倍、50—60

歳デハ 2.4 倍デアル。然ルニ 16—20 歳デハ其差ガ小兒期ヨリ減ジ、21—35 歳ニ於テハ内地ト大差無イ。從テ第 2 表ヲ見ルト、内地ノ曲線デハ見ラレナイ様ナ山ガ高年者ノ所ニ出來テ居ル。然シ之ハ高年者ノ山ト見ルヨリモ青壯年者ノ所ニ不自然ナ谷ガ出來タノダト考ヘル方が正シイト思フ。即チ此年齢階級ニ於テハ、内地ニ歸還シテ死亡シタ者ガ多イ爲ニ、滿洲デノ死亡率ガ下ツテ居ルノデアル。

夫故若シモ此年齢ノ青壯年級ノ患者モ内地ニ歸還セズニ滿洲ニ留ルモノト假定スルト、滿洲デ治癒スル者モアル一面ニハ滿洲デ死亡スル者モ生ズルカラ、死亡率ハ現在表面ニ現ハレテ居ルモノヨリモ遙カニ高クナル道理デアル、ソシテ此死亡率ノ曲線ハ 16—20 歳ノ山ノ頂カラ急ニ降ルコトナシニ、恐ラク内地ノ曲線ニ添ツテ 21—25 歳デ更ニ昇リ、夫ヨリ徐々ニ降り、51—56 歳ノ山ノ頂ニ連絡スルデアラウト考ヘルコトハ無理デナイト思フ。何故ナラバ其曲線ハ内地邦人ノ死亡率線ト略々平行ヲ保チ、恐ラク自然ニ近イモノト見ラレルカラデアル(昭和 12 年ノ年齢別結核死亡率モ發表サレテ居ルニ拘ハラズ、昭和 10 年ヲ選クノハ、此年ニ國勢調査ガ行ハレタ爲メ、死亡率算出ノ基礎ヲナス人口ガ正確デアルヲ以テデアル)。

倍 15 歳迄ノ少青年ト 51 歳以後ノ老年者ハ發病シテモ内地ニ歸ヘル者が少イト見テ死亡率ニ訂正ヲ加ヘズ、16—50 歳ノ間ニノ訂正ヲナスコトニスルガ、訂正率ヲ何ニ取ルカガ難問題デアツテ、今適當ナ資料ガ無イ。依テ止ムナク一案トシテ 16—20 歳ノ在滿邦人ト内地日本人トノ結核死亡率ノ差ヲ參考トシタ。即チ此年齢ニ於テハ内地ニ比シ 38% 増シニナツテ居リ、内地歸還死亡者ヲ推定シテ加ヘ 50% 増シト見積リ、之ヲ標準トシテ訂正シ、21—25 歳ニ於テモ内地ノ 32.2 = 50% 加ヘタ 48.3 ヲ以テ在滿邦人結核死亡率ト訂正スル。夫カラ 51 歳デモヤハリ 50% 増シトシテ計算スルカドウカト云フニ、夫デハ内地ノ曲線トマダ懸ケ離レテ居ツテ不自然ノ

第 2 表 在滿日本人年齢別結核死亡率
(人口 1 萬ニ付)



觀ヲ脱セヌカラ、自分ハ別ノ方法ヲトリ、21—25 歳ノ訂正死亡率 48.3 ト云フ最高峰カラ 51—55 歳ノ所ノ山ノ頂ニ向ツテ直線ヲ引キ、此線ト年齢線ノ交又點ヲ讀ンデ各年齢級ノ結核死亡率ヲ推定シテ大過ナイ様ニ思フ。何故ナラバ斯クシテ出來タ在滿邦人ノ訂正結核死亡率曲線ハ内地ノ死亡率曲線ト大體並行スルカラデアル。斯クシテ推定シタ結核死亡率ヲ各年齢級ノ人口ニ掛ケテ、昭和 9—10 年ノ結核死亡數ヲ算出シ、夫ヲ全部合計シ全人口ニ對スル率ヲ出シテ見ルト、1 萬ニ對シ 31.2 トナル、之ハ結核ニ罹ツタ在滿邦人ガ内地ニ歸還セヌモノト假定シタ

場合ノ結核死亡率ノ最低限度ト見ルバモノト考ヘル。即チ訂正セザル率 21.8 ヨリ 44% 多く、内地日本人ノ 19.1 ニ比シテ 62.5% ノ増加デアル。簡單ニ云ヘバ、在滿邦人ノ結核死亡率ハ内地(全國)ニ比シ少クトモ 6 割以上多イト見テヨイデアラウ。

尤モ在滿邦人ト云ツテモ、夫ハ關東州及鐵道附屬地ノ住民デ、殆ンド全部都會地生活者デアルカラ、日本全國ニ比スルヨリハ寧ロ内地ノ都市ト比較スベキデアルト云フ見地カラスレバ、昭和 10 年ノ内地人口 10 萬以上ノ都市平均死亡率 24.2 ニ對シ、在滿邦人訂正死亡率 31.2 ハ約 3 割増デアル。

次ニ大連市ノミニ就テ見ルニ各人種合計デハ昭和 12 年度ニ 1155 名結核デ死亡シ、人口 1 萬ニ付 22.9 ニ當リ、内地人デハ 414 名、人口 1 萬ニ付キ 26.7、之モ内地人口 10 萬以上ノ都市ヨリ高率デアル。マシテ内地歸還後ノ死亡者ヲ加フレバ一層高率トナルノデアル。

大連市ニ於テ火葬ニ附セラレタ内地人結核屍體ハ人口 1 萬ニ付 39.8 肋膜炎ヲ加フレバ 628 名デ人口 1 萬ニ付 42.8 ニ上ル。大連ハ滿洲ノ南端デアリ、醫療施設殊ニ結核療養機關ガ他ヨリモ豊富デアルカラ、結核患者ガ自然集マリ、從テ死亡者モ多ク出ルノミナラズ、内地歸還ノ足ダマリトナル場所デアル爲メニ、一時的滞在者ノ死亡モ之ニ加リ愈々火葬數ハ多クナルノデアアル。

第 3 表 大連市結核性疾患屍火葬數

年次	肺其他ノ結核	同人口 1 萬ニ付	肺其他ノ結核及肋膜炎	同人口 1 萬ニ付
昭和 10	527	39.2	562	41.8
同 11	582	41.6	630	45.7
同 12	643	41.4	677	43.6
同 13	608	37.1	645	40.0
平均	587.5	39.8	624.5	42.8

次ニ滿人ノ結核死亡率ハ關東州デハ人口 1 萬ニ付 19.5、附屬地デハ 21.4、何レモ在滿日本人ヨリ低率デアル。之ハ本質的ノ差異デナク、診斷ノ附シガニヨル誤差デナイカト云フコトモ當

然考ヘラレルケレド、他ノ方面ノ觀察ナドカラ考ヘテ、實際結核死亡率ハ低イノデアラウト思フ。

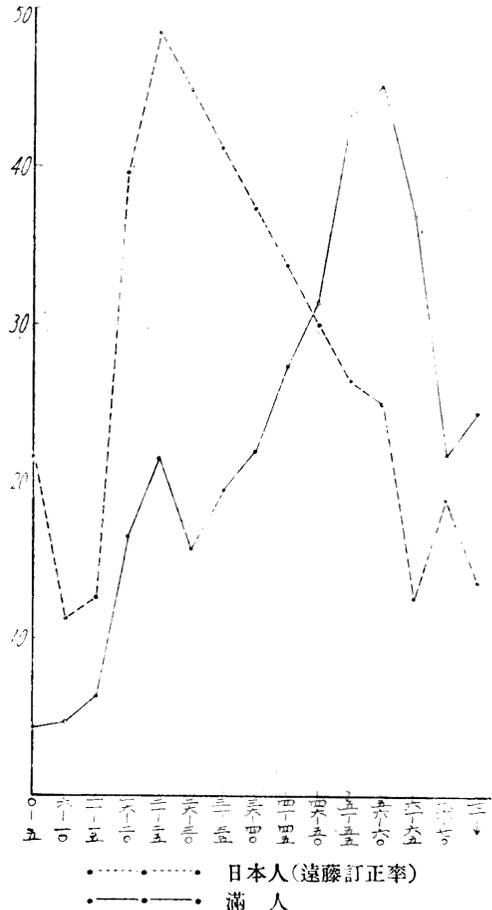
猶滿人ニ於テハ青壯年級ノ結核死亡率ガ日本人ニ比シテ著シク低イコトガ目ニ付ク、40歳カラ段々高クナリ、56—60歳デ最高ノ44.8ヲ示シテ居ル(昭和9—10年度平均)、之ヲ先ニ述ベタ在滿邦人ノ訂正死亡率ト共ニ曲線ニシテ比較スルトソコニ著シイ相違ヲ示ス(第4表)。

此關係ハ臺灣ノ本島人ノ結核死亡率ト酷似スル所ガアル。即チ臺北ノ小田教授ヤ總督府ノ曾田技師等ノ報告ニヨルト、本島人各年齢級1萬ニ對スル當該年齢ノ結核死亡率ノ曲線ハ青壯年級ニ於テ山ヲ形成スルコトナク、小兒期カラ60歳マデ上リ坂ノ一途ヲ辿ルノミデアル。然シテ臺灣ニ於ケル内地人ハ内地ヤ滿洲ト異リ、青壯年ニ於テ死亡率ガ高ク無イノデアルガ、而シ15歳カラ25歳ニカケテ少シク上ツテ小丘ヲ示シテ居ル。思フニ臺灣ニ於テモ青壯年ハ結核罹病後内地ニ歸還シテ死亡スル者ガ相當多イデアラウカラ、夫ヲ考慮シテ訂正死亡率曲線ヲ畫クナラバ、ヤハリ青壯年級ニ於テ高イ山ヲ作ルデアラウ。即チ臺灣ニ於テモ内地人青壯年ト本島人ト夫トノ間ニ結核罹病度ノ差異ガカナリアルコトガ察セラレル。

要スルニ日本人ハ内地ニ於テモ滿洲ニ於テモ將又臺灣ニ於テモ、青壯年ノ結核死亡率ガ高イガ滿人或ハ臺灣本島人ニ於テハ之ニ反スルノデアアル。之ハ甚ダ興味アル事實デ、其差ノ由テ來ル理由ヲ闡明スル事ガ重要デアアル。何トナレバ此方面ノ調査ガ我國ノ結核豫防對策ノ上ニ重要ナル示唆ヲ與ヘルカモ知レヌカラデアアル。滿人青壯年ハ本來强健ナル出稼労働者ヲ多ク含ムコトモ結核死亡率ノ低イ一因ヲナスカモ知レヌガ、夫ノミデハ説明出來ヌ。

自分ハマダ之ニ對スル適確ナル答ヲナシ得ル資料ヲ持タナイガ、唯然シ日本人ハ滿人ヤ臺灣本島人ニ比シテ青壯年時代ニ抵抗力ヲ減弱セシムル動機ガ多イノデアラウト考ヘテ間違ナイ様ニ

第4表 在滿日本人及滿人ノ年齢別結核死亡率比較(人口1萬ニ付)
(昭和9—10年度)



思フ。然ラバ其動機トハ何ゾヤト云フニ、特ニ業務ニ勤勉ニ過ギルモノ、不攝生ナル私生活ニ耽溺スルモノ、或ハ兩者ヲ兼ヌルモノガ多ク、ツマリ體養ノ足ラヌ體力ヲ消耗シ過ギル國民ガ青壯年級ニ特ニ多イノデナカラウカ。

次ニ滿鐵共濟社員(日本人)結核死亡率ハ昭和13年度ニ於テ社員1萬ニ付37.5デアアル。肋膜炎ヲ除クト32.8アル。共濟社員ノ平均年齢ハ男30歳、女23歳(男18—34、女17—23歳ガ過半数ヲ占ム)デアルカラ、内地同年輩(即21—30歳)ト比較スルト後者(昭和10年)28.5デアツテ、滿鐵社員ノ方が死亡率ガ高イ。

猶滿鐵共済社員ノ昭和10年度ニ於ケル肺疾患死亡者ハ死亡者總數ノ44.3%ニ當リ、昭和9年度内地鐵道省共済組合ノ同様計算ニヨル率23.8%ニ比シ著シク高率デアル。
又肺結核、肺浸潤、肺炎「カタル」ニヨル廢疾者

ハ全廢疾者ノ77.6%デアルガ、鐵道省ノ夫ハ59.6%デ、ヤハリ滿鐵ノ方ガ高率デアル。
要スルニ滿洲ニ於ケル日本人ノ結核ハ文明國中最も高率ヲ示ス日本内地ヨリモ更ニ高率デア

第5表 各國結核死亡率比較表(人口1萬ニ付)
學術振興會編、國民保健ニ關スル統計資料、日本結核事業總覽及ビ
内閣大日本帝國統計年鑑等ニヨル

年次	西 曆	イ ン グ ラ ン ド	フ ラ ン ス	イ タ リ ー	ド イ ツ	北 米	日 本	在 滿 日 本 人
		ウ ェ ー ル ス						
大正14	1925	10.39	13.60	15.32	10.6	9.28	19.4	20.7
昭和 1	26	9.61	19.58	14.67	9.8	—	18.7	19.6
2	27	9.72	17.51	13.63	9.3	8.87	19.5	19.4
3	28	9.28	16.66	12.79	8.8	9.13	19.2	23.9
4	29	9.59	16.78	12.37	8.7	8.79	19.7	21.5
5	30	8.98	16.1	11.15	7.9	8.31	19.7	22.3
6	31	8.96	15.2	10.82	7.9	6.78	18.6	20.7
7	32	8.37	14.0	10.38	7.6	6.25	18.6	20.8
8	33	8.24	13.1	9.91	7.3	6.00	18.8	22.4
9	34	7.63	—	9.25	7.2	5.9	19.3	22.4
10	35	7.6	12.4	8.9	7.4	5.5	19.1	21.8
11	36	—	—	—	7.3	5.6	20.7	21.6
12	37	—	—	7.9	6.2	—	19.3	22.6
13	38	—	—	—	—	4.9	20.6	—

次ニ累年結核死亡率ヲ見ルニ、在滿邦人ノ結核死亡率ガアマリ著シイ増減ヲ示シテ居ラス。結核ニ罹ツテ内地ニ歸ヘラズ滿洲ニ留ル患者ノ率ハ年々増加シツ、アルコトハ疑ナキ事實ナルニ

拘ラス、死亡率が増サナイト云フコトハツマリ發病率ガ減ジツ、アルカ、或ハ經過ガ良ク治癒率ガ増シツ、アルモノト想像シテ良イト思フ。

第6表 在滿邦人累年結核死亡率
(人口1萬ニ付)

年次	結核死亡率	年次	結核死亡率
大正 5	23.7	昭和 2	19.4
6	26.2	3	23.9
7	20.4	4	21.5
8	27.3	5	22.3
9	19.3	6	20.7
10	20.5	7	20.8
11	19.7	8	22.4
12	18.2	9	22.4
13	18.2	10	21.8
14	20.7	11	21.6
15	19.6	12	22.6

第2節 結核罹病率

在滿邦人ノ結核罹病率ヲ需ムルニ、死亡率ヲ10倍スル一般ノ方式ニ從ヘバ、自分ノ訂正死亡率31.2(人口1萬ニ付)ヲ基礎トスルトキ、人口ノ31.2%ト云フコトニナル。

嘗テ昭和2年本間英史氏ハ長春醫院ノ患者統計ヲ基礎トシテ、在滿邦人ノ肺結核罹患率ハ人口ニ對シ34.25%ト算定シタ事ヲ參考迄ニ附言スル。

最近在滿日本大使館教務部保健課カラ、滿洲ニ於ケル内地人中等學校生徒ノ健康調査報告ガ發表サレタガ、夫ト日本文部省體育課ノ發表ニカカル中等學校生徒ノ同様調査トヲ比較スルト、

結核死亡率ト退學率ハ滿洲ト内地ト大差無イガ、結核ニヨル休學ト缺席ハ滿洲ノ方ガ稍々多ク、4ニ對スル5ノ割合デア。死亡及退學モ埼玉縣ノ中等學校ニ比較スルト滿洲ノ方ガカナリ高率デア。即チ死亡ハ埼玉縣ノ49%ニ對シ滿洲66.1%退學ハ埼玉42.1%ニ對シ滿洲66.6%デア。

次ニ滿鐵共濟社員ノ結核罹病率ヲ見ルニ、肺結核、肺浸潤、肺炎「カタル」ノ病名ヲ以テ治療ヲ受ケタ人員ハ社員1000名ニ對シ56.8名(昭和6-13年、8ヶ年平均)、肋膜炎ハ同年間平均21.2名ニ相當ス。

滿鐵ハ醫療機關ガカナリ完備シ、且共濟組織モ良イ爲メニ極メテ輕症者モ算入サレテハ居ルガ、夫ニシテモアマリ低イ罹病率トハ云ヘヌ。吾々ノ南滿洲保養院ニ於テハ滿鐵傍系會社ノ新社員採用時健康診斷ヲ引受ケ、昭和10年カラ14年マデ4ヶ年ニ採用サレタ者ハ男512名、女50名、合計562名デア。14年末マデニ男19名、女2名ガ結核性疾患デ休養シタノデア。但シ此21名中2名ハ採用時ノ健康診斷デ活動性結核ヲ認メ、不合格ト判定サレタケレド特殊技能者ナル爲ニ採用シタ者デアカラ、之ハ除外シ、56名採用シテ19名ノ罹病トシテ計算スルナラバ3.4%トナル。處デ此560名ハ採用匆々ノ者モアリ既ニ4年經過シタモノモアルカラ平均2ヶ年ト見ルコトガ出來ル。即チ2ヶ年間ニ於テ560名カラ3.4%ノ結核患者ヲ出シタノデアカラ、1ヶ年ニハ1.7%ニ當リ、之ハカナリ低イ率ト云ツテヨイ。之ハ採用時ニ嚴密ナ検査ヲ施行シタ效果ガアツタノダト思フ。採用後ノ健康監理ヲ更ニ良クスル事ニヨリ、一層此罹病率ヲ下ゲ得ルデアラウ。

猶上述19名ノ結核發病者ハ入社時「ツバルクリン」陰性者カラ5.7%、陽性者中カラハ2.8%出タノデア。即チ陰性者カラノ發病率ハ約2倍デア。事實ニ鑑ミ、陰性者即チ未感染者採用後ハBCG接種ヲ行ヒ、又傳染源タル開放性結核患者ノ發見其他特別注意ノ下ニ健康監理ヲ行フ

第7表 大連某會社結核罹患率
(南滿洲保養院健康診斷合格者)

	「ツ」反應 陰性	「ツ」反應 陽性	合計
採用人員	104 (18.6%)	456 (81.4%)	560
肺結核	4	10	14
肋膜炎	1	2	3
腹膜炎	1	1	2
結核性疾患合計	6	13	19
同%	5.7	2.8	3.4

ナラバ、一層ノ好成績ヲ期待出來ルト思フ。次ニ健康診斷ニヨル結核發見率ニ就テ述ベ。昭和13年ニ大連市ニ於ケル小學兒童ノ入學前2ヶ月ノ検査ヲ小松、山田兩氏ト共ニ行ツタ成績ハ、全員995名ノ中養護學級ニ入ルベキ程度ノ胸部結核變化アル者11.6%、「レントゲン」變化及血沈促進ヲ示シ就學延期ヲ療養セネバナラヌ者1.8%即チ全兒童中18名有ツタノデア。次ニ山田、惣中兩氏ガ翌昭和14年ニ大連市兒童2082名ニ就キ入學前10ヶ月ノ時、同様ノ検査ヲ行ツタ結果ハ療養ヲ要スル者0.7%養護學級向キガ2.1%、要注意者4.2%デ前年吾々ノ調査ニ比シテ好成績デアツタノハ、8ヶ月早キ爲メ「ツバルクリン」反應陽性者ノ率ノ低カツタコトニ關係スルデアラウ。此大連ニ於ケル成績ト京橋區ニ於ケル野津氏等ノ成績トヲ比較スルトキ大連ノ方ガ高率デア。コトヲ否ミ難イ。

第8表 大連市兒童結核調査成績
(東京市トノ比較)

報告者	被檢者	人員	「ツ」陽性反應(%)	要注意(%)	要養護(%)	要治療(%)
遠山、小松、山田	大連市兒童入學前2ヶ月	995	26.9	8.6	11.6	1.8
山田、惣中	同入學前10ヶ月	2082	17.4	4.2	2.1	0.7
野津、井上	京橋區兒童新入學時	2513	20.4	1.5	0.6	0.08

次ニ大人ニ就テ健康診斷時ニ發見サレル要治療的活動性結核ノ率ヲ滿洲ト内地ト比較シテ見ル。

第 9 表 健康診断ニ表ハレン要治療結核例

地名	被検査人員	年齢	ツベルクリン反応陽性(%)	要治療結核(%)	報告者
大連	諸會社ノ就職希望者 1453	15—40	70.0	3.4	秋月其他
哈爾濱	滿鐵社員 469	主トシテ 16—30	96.0	5.8	赤沼其他
大阪府	壯丁豫備検査 21362	19—20	69.1	0.6	貴嶋其他
同	小學教員 11844	20—60	87.5	0.8	中村其他
東京市	帝大新入生 1477	20—26	72.3	0.6	稻田其他

検査成績ノ判定標準ニ差異モ有ラウガ、滿洲ノ方ニ活動性結核ガ多ク發見セラレルモノト見ネバナラス様デアル。

猶滿鐵社員ノ定期健康診断ニヨル胸部結核性疾患率ハ昭和 10 年カラ 13 年迄ノ 4 ケ年平均 1.7% デアル。然シ此間ノ滿人社員ノ夫ハ 0.6% デアル。此健康診断ハ全部ニ對シテ「レントゲン」検査、血沈測定等ヲ行ツタノデ無イノト、病缺中ノ者ガ除カレテ居ルカラ實際ノ患者數ヨリモ少イコトハ勿論デアル。

第 10 表 滿鐵社員定期健康診断成績
胸部結核性疾患率

年度	日本人	滿人
昭和 10	2.8%	1.3%
11	1.4	0.4
12	1.1	0.2
13	1.4	0.5
平均	1.7	0.6

次ニ人種別ノ結核患者數ヲ比較スルト、日本人ハ滿人ニ比シテ結核性疾患率ガ高イト見ルガ正シイト思フ。

滿人ハ一般ニ衛生思想ヲ缺キ、室内ニスウ吐痰スル者ガ多イ程デアルカラ、感染者ノ率ノ高イ事ハ次第ニ述ベル通りデアルガ、要治療の患者ハ意外ニ少イ様デアル。勿論人口ガ非常ニ多イノデアルカラ、患者數モ從テ多イケレドモ、人口ニ對スル率ハ低イ、尤モ其統計資料ハ甚ダ乏シイノデアルガ、而シ夫デモ大體ノ見透シハ付ク様ニ思フ。

此滿人ニ結核ガ日本人ヨリ少イト云フコトハ朝鮮ニ於ケル朝鮮人ト内地人トノ關係ニ似テ居ル。京城醫專ノ成田、北村、倉行 3 氏ノ報告ニヨ

レバ、同校入學試験受験生 1423 名(内地人 763、朝鮮人 660)ヲ檢シ、其内「レントゲン」検査ノ要アリシ者内地人 530 名、朝鮮人 222 名デアツタガ、其結果慢性肺癆ガ内地人 6 名朝鮮人 1 名、早期浸潤ハ内地人 27 名、朝鮮人 5 名、斯様ニ朝鮮人ニ比シテ内地人ノ罹患率ハ高イ。ソシテ此著者等ハ京城ニ於ケル内鮮共學專門學校程度ノ學生ニ於テ、長期缺席、休學、死亡等ガ内地人ノ方朝鮮人ヨリ遙カニ多イコトヲ指摘シテ居ル。

猶康德 2 年(昭和 10 年)滿洲帝國陸海軍患者統計ニヨレバ、兵員毎 1000 名ニ對シ結核ハ平均 3.84 デ同年度ノ關東軍ノ結核 11.8 ニ比シテ 3 分ノ 1 弱デアル。肋膜炎ハ平均 4.65 デ同年度ノ關東軍ノ 23.2 ニ比シ約 5 分ノ 1 デアルト柳野軍醫大佐ガ報告シテ居ル。

又滿洲醫科大學原内科ノ西山氏ノ調査ニヨレバ、日本人ノ肋膜炎例ハ總患者數ノ 6.6% デアルノニ對シ、滿人デハ 3.3% 即チ度半分デアル。次ニ滿鐵社員ノ滿人ニ於テハ更ニ日本人トノ差ガ大キイ。即チ日本人ハ社員 1000 名ニ付キ肋膜炎ガ 24.7 名ニ起ルガ滿人デハ僅カニ 3.5 名即チ 7 分ノ 1 ニ過ギナイ。

之等ノ事實ニヨリ自分ハ滿人ノ結核罹病率及死亡率ガ日本人ヨリ低イト云フコトヲ信ズルモノデアル。

第 3 節 「ツベルクリン」反應陽性率

「ツベルクリン」反應陽性率ヲ以テ直チニ結核患者率ヲ想定スル事ハ出來ヌケレドモ、此檢索ニ

ヨツテ結核菌汚染度が知レ、又活動性結核發見ノ一手投トモナリ、又陽性轉化時ノ警戒等ニ役立つツノデ、各地ニ於テ検査サレ且報告サレル。滿洲ニ於テ大規模ノ検査ヲ遂ゲタノハ飯尾其他ノ諸氏ガ關東州内ノ學校生徒ニ就テ行ツタノト、滿鐵衛生課ガ鐵道沿線諸都市ノ生徒及大連ノ專門學校生徒ニ就テ行ツタモノデアル。此ノ成績中日本人小學兒童ノヲ簡單ニ年齢別ノ

表トシ、之ト内地ノ成績ヲ比較シテ見ルト、滿洲ノ方概シテ陽性率が低イ。強ヒテ云ヘバ13歳以上デ日本全國ノヨリ高イノデアルガ、元來滿洲ニ於ケル日本人ノ生活ハ内地ノ大都會ト同様ト見テヨイノデアルカラ、此見地カラ内地大都市ト比較スレバ、全年齡ヲ通ジテ在滿邦人兒童ノ陽性率が低イト云ヘル。然ルニ前項ニ述べタ通り、結核死亡率及罹患率ハ高イノデアル。

第11表 日本人小學兒童「ツベルクリン」反應陽性率

報告者	年度	地 域	年 齡										
			人 數	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
飯尾其他	昭和11	大連市	22347	24.1	24.1	27.2	30.4	35.4	37.4	41.7	46.3	49.0	
滿鐵	..	滿鐵沿線	21415	24.3	25.9	28.7	33.4	39.1	43.3	45.7	52.0	51.8	
向後	昭和9	日本全國	26355	28.6	32.7	37.0	37.5	41.3	46.4	45.7	46.4	41.4	
..	..	日本ノ人口10萬以上ノ都市	17614	33.1	36.0	41.7	43.4	48.3	56.9	53.6	57.3	49.6	
..	..	同人口10萬以下ノ都市	7539	20.1	24.0	21.5	24.1	24.6	30.4	30.6	30.3	36.9	
學級別			年 級	1	2	3	4	5	6	高1	2		
京橋區役所	昭和13	東京京橋市區		21.9	26.7	36.9	40.0	36.7	48.8	61.4	70.7		

此表ニ於テ目ニツクコトハ關東州ニ比シテ沿線ニ於テ陽性率ノ高イコトデアル。其點ガ次ノ表デ一層明カニナル。

第12表 滿洲諸都市ニ於ケル日本小學兒童「ツベルクリン」反應陽性率

滿鐵衛生課調			
都 市 名	陽性率 (%)	都 市 名	陽性率 (%)
哈爾濱	46.5	蘇家屯	29.0
吉林	29.7	遼陽	29.7
新京	36.2	鞍山	35.1
公主嶺	30.5	大石橋	27.6
四平街	35.1	營口	25.8
開原	39.9	瓦房店	26.1
鐵嶺	41.8	大連	33.9
撫順	36.9		
奉天	41.4	大都市平均	36.54
安東	32.1	北部小都市平均	35.74
本溪湖	28.7	南部小都市平均	27.89

之ハ北カラ南ニ向ツテ列記シタノデアルガ、大體北部殊ニ大都會ニ於テ高率デアル。即チ一審

北ニアル哈爾濱ガ最高率、次ニ奉天、新京、大連ノ順デアル。新京ハ奉天ヨリ北デアルノニ陽性率が奉天ヨリ低イノハ、ツマリ人口ノ密度ガ奉天程デナイ爲デアラウ。要スルニ滿洲ノ小學兒童ノ「ツベルクリン」反應陽性率ハ北部ニ於テ高く、又大都會ハ小都會ヨリ高イノデアル。即チ大都市平均36.5%、次ガ北部都市デ平均35.7%、最も低イノガ南部小都市ノ平均27.9%デアル。

「ツベルクリン」反應陽性率ト出生地ノ關係
大連市内居住ノ日本人ニ就キ其出生地ノ關係ヲ飯尾氏等ガ調査シタ處ニヨルト、内地生レガ最

第13表 「ツベルクリン」反應ト出生地 (飯尾氏其他)

出生地	小學校	中等學校
内地	32.00%	49.74%
滿洲	34.46	50.09
朝鮮	40.07	60.34

低率、次が滿洲生レデ、最高率デアツタ。
先ニ滿洲デハ内地ヨリモ陽性率が低イト云ツタ
が、果シテ然ラバ内地生レヨリ滿洲生レノ方が
低率デアリサウニモ思ヘルガ、此表デハ滿洲生
レガ高率デアル。之ハ思フニ内地生レノ小學兒
童ハツマリ内地カラ渡滿シテマダ間ノナイ者デ
アルガ、其出生地ガ内地ノ大都會ヨリモ地方ノ
者ガ多カツタトスレバ、「ツベルクリン」陽性率
ノ低イノガ當然デ、大連ト云フ人口稠密ナ都會
ニ生レテ生長シタ兒童(大連以外デノ滿洲生レ
モ大多數都會地ニテ生長スル)ト比較シテ低率
ナルコトガ想像ニ難クナイ。

一方中等學校生徒ニ於テハ内地生レト滿洲生レ
トノ差ガ殆ント無イノハ内地生レトハ云ヘ既ニ
滿洲生活ガ相當永クナルカラ滿洲生レト區別ガ
付カナクナルノデアラウ。

朝鮮生レ邦人ニ於テハ小學校デモ中等學校デモ
高率デアアルガ、之ハ朝鮮ノ結核汚染度ガ高く、
幼少ノ時ニ早く感染スル者ノ多イコトヲ示ス
デアノウ。

京城帝大小兒科ノ調査ニヨレバ京城師範附屬小
學兒童ハ13歳デ50%陽性、10歳デモ45.1%ノ
高率ヲ示シテ居ル。

猶内地生レト滿洲生レトノ差異ニ關スル他ノ報告
ヲ紹介スレバ、山田、惣中兩氏ガ大連市兒童ニ
就テ、昭和14年6月カラ8月ニカケテ調査シ
タ成績モ、滿洲生レガ陽性21.2%ナルニ對シ、
内地生レハ16.9%デアツタ。

然シ小松氏ガ大連保健所デ健康診斷ヲシタ7819
名中6—25歳ノ日本人ニ就テ比較シタ結果ハ、
之等ト反對ノ成績デ、滿洲生レノ方が渡滿者ニ
比シテ低率デアツタ。殊ニ6歳カラ15歳マデ
ノガ低イノデアアル。何故ニ前述2報告ト相異ス
ルカト云フコトハ明白デナイガ、小松氏ノ調査
シタ渡滿者中内地ヤ朝鮮ノ大都會生レガ偶然ニ
モ多ク居ツタノカモ知レヌ。即チ一口ニ内地生
レト云ツテモ渡滿前ニ田舎ニ住ンデ居ツタカ大
都市ニ居ツタカバ問題デアル。

次ニ生活程度ト「ツ」反應陽性率トノ關係ニ就
テ飯尾氏其他ノ調査ガアル。

第14表 生活程度ト「ツ」反應陽性率
飯尾氏其他

	性 別		學 校 別	
	男	女	小學校	中等學校
上 流	35.0	31.0	29.0	46.5
中 流	40.4	37.4	33.5	50.6
下 流	47.3	41.5	43.0	54.4

即チ上流カラ中流、下流ト順次陽性率ガ高クナ
ル。然シ滿人ニ於テハ其差ガ少イ。

猶南滿洲保養院ノ秋月氏等ガ大連ニ於ケル滿鐵
關係ノ生徒(工業專門學校、技術養成所、工業
實務學校、育成學校、工作工養成所、鐵道學院)
ニ就テ調査シタ處ニヨレバ15歳乃至36歳デ陽
性率ガ69.8%デアル。ソシテ15—16歳デ50%
強ガ陽性トナツテ居ル。

第15表 大連市内滿鐵諸學校生徒
「ツ」反應陽性率
(2000倍乃至200倍、5mm以上ヲ陽性トス)

年 齡	人 員	陽性者	同 %
15	210	113	53.8
16	512	256	50.0
17	292	185	63.3
18	271	185	68.3
19	344	257	74.7
20	271	207	75.5
21	166	138	83.1
22	86	78	90.7
23	109	91	83.5
24	67	62	92.5
25	65	62	93.8
26—30	131	121	92.4
31—36	19	19	100.0
計	2546	1774	69.8

(秋月氏其他)

次ニ「ツ」反應陽性轉化率ニ就テ述ベル。之ハ其
團體ノ種類及年齢ニヨリ、又季節ノ關係モアツ
テ複雑デアル。

第16表 「ツ」反應陽轉率

地名	被検査	1ヶ月平均陽轉率(%)	検査者
大連市	日本小學校兒童	0.9	小松氏
同	同	1.1	同
城子瞳	滿人小學兒童	2.3	同
大連市	日本人小學兒童	0.9	山田、物中氏
同	同	2.3	南滿保養院
チーハル	同	1.5	日置氏
北滿	青少年義勇隊	0.8	秋月氏
同	同	2.0	木下氏
同	同	1.1	富田氏
同	同	1.5	山口氏
新京市	同	春秋 2.2 0.8	本間氏
東京市	同	0.7	野津氏
同	帝大新入生	1.2	稻田氏
大阪市	小學兒童	0.4	坂本氏
松江市	同	2.5	田代氏

一體「ツ」反應陽性率其物が南滿ヨリモ北滿ニ於テ高イ事ト、内地デモ滿洲デモ感染ノ機會ガ春夏ヨリモ冬季ニ於テ多イト云フ事實ヲ考ヘルト、此陽性轉化率モ内地ヨリ滿洲ノ方高率デアリサウニ思ヘル。實際松江市ヲ例外トスレバ幾分滿洲ノ方ガ高率デアル様ニ見エルガ大差ハ無イ。之ハ更ニ多數ノ例デ比較シタイモノデアル。

「ツ」反應陽轉率ト季節トノ關係ニ就テハ先ニ日本内地ニ於テ、東京市療養所ノ(太田良海氏)調査ガアル。夫レハ東京齒科醫專學生ヲ昭和11

第17表 「ツ」反應陽轉率ト季節ノ關係 (太田良海氏)

東京齒科醫專徒	検査時	前驅期間	陽轉例數		推定感染期	
	5月	前年11月ヨリ半年間	69		寒冷季	
11月	5月ヨリ半年間	59		暖暑季		
東京市療養所婦	陽轉月	V	VI	VII	VIII	IX X 計
	例數	5	6	3	5	0 4 23例
	陽轉月	XI	XII	I	II	III IV 計
	例數	6	3	13	8	4 3 37例

年5月以來年2回、5月ト11月ニ検査シタ結果、5月ノ検査デノ陽轉者ガ多イ。即チ冬季ト早春ノ感染ガ多イト云フコトヲ證明シタ。

同氏ガ猶東京市療養所看護婦ニ就テ、1ヶ年間毎月「ツ」反應陽轉検査ヲ續行シタ結果ハ5月ヨリ10月迄ノ陽轉23例ニ對シ、11月ヨリ翌年4月迄ノ陽轉ハ37例デアツタ。

滿洲ニ於テハ本間賢亮氏ガ新京ノ學童ニ就キ1ヶ年間5回「ツ」反應ヲ檢シ、表ニ示ス如ク5月ノ検査ニ於テ1ヶ月平均2.21%ノ陽轉率ヲ示シ冬季間ノ新感染ノ最モ多イ事ヲ立證シテ居ル。

第18表 新京市學童「ツ」反應陽轉率季節別 (本間賢亮氏)

検査時	前驅期間	陽轉率(%)	1ヶ月平均陽轉率(%)	推定感染期
5月	2月カラ3ヶ月	春秋 6.64	2.21	冬季
10月	5月カラ5ヶ月	夏 1.04	0.81	春季
12月	10月カラ2ヶ月	秋 2.29	1.14	夏季
2月	12月カラ2ヶ月	冬 3.66	1.82	秋季

滿人及ビ朝鮮人ノ「ツ」反應 滿大ノ廣木氏等ガ奉天市内ノ小學校及中等學校ノ滿人生徒ニ就テ

第19表 「ツ」反應陽性率日滿人比較

調査者	滿大	滿鐵	飯尾氏	同
地名	奉天	沿線主要都市	大連	同
人種	滿人	日本人	日本人	滿人
8歳	46.7	25.9	24.1	50.0
9	55.6	28.7	27.2	51.5
10	56.3	33.2	30.4	57.3
11	60.2	39.1	35.4	63.5
12	65.0	43.3	37.4	63.3
13	68.0	45.7	41.8	65.9
14	71.5	52.0	46.3	71.0
15	78.3	51.8	49.0	71.7
16	76.0	59.3	51.2	69.9
17	83.7	64.3	61.6	72.8
18	80.8	72.2	68.9	63.5
19	85.8	74.4	77.7	77.4
20	85.8	63.5	91.7	80.4
21	91.3	72.5	100.0	81.3
22	91.7	80.0		100.0
23	100.0	66.7		100.0

ノ調査ト滿鐵衛生課ガ沿線ノ生徒ニ就テ調べタ成績ヲ比較シ、又大連デ飯尾氏等ガ日本人生徒及滿人生徒ヲ調べタ成績ヲ比較スルニ第 19 表ノ如ク滿人ノ方著シク高率デアル。殊ニ目ニ付クコトハ少年期ニ於テ陽性者ノ多イコトデアル。猶山田、惣中兩氏が大連市公學堂 6 校、中

學校 1 校ノ滿人生徒ニ就テ調査シタ處モ、ヤハリ日本人ニ比シテ陽性率ガ著シク高カツタ。猶日滿鮮ノ接客業者ニ於ケル「ツ」反應陽性率ヲ見ルニ第 20 表ノ如ク、滿人及朝鮮人ニ於テ概シテ高率ナルヲ知ル。

第 20 表 日鮮滿接客業者「ツベルクリン」反應陽性率(%)

報告者	年次	地方及業態	年 種	人員	16—20	21—25	26—30	31—40	41—50	51→	計
關東保健館	昭和 14	大連接客業	日	3464	68.2	80.8	87.3	70.0	80.0	91.2	80.0
			滿	2466	66.2	91.1	94.0	94.6	91.4	91.6	88.0
奉天省警務廳	..	奉天接客業	滿	1663	90.5	95.3	94.8	97.6	93.8	90.0	94.3
野見山、樺島 兩氏	昭和 12	鞍山賣笑婦	日	151		17 歳			40 歳		92.0
			鮮	27		20 歳			26 歳		81.8
廣木氏等	..	奉天妓女	滿	249		17 歳			10 歳		93.0
			滿	819		17 歳			36 歳		94.6

次ニ本間氏が新京ニ於テ日鮮滿兒童ニ就テ比較調査シタ處ニヨルト、第 21 表ノ如ク、ヤハリ鮮滿人ノ陽性率ガ高イ。

第 21 表 新京ニ於ケル日鮮滿兒童「ツ」反應
(本間賢亮氏)

年齢	人種		
	日本人	朝鮮人	滿洲人
7	25.2%	42.6%	27.3%
8	34.2	55.5	47.0
9	35.6	59.0	52.4
10	44.2	61.7	61.2
11	43.3	68.2	75.0
12	55.5	68.2	79.1
13	57.4	82.7	86.8
14	63.7	88.6	89.4
15		84.2	77.6
16		85.0	79.0
17		100.0	100.0
平均	43.2	65.8	73.1
人員	3789	927	1096

又箭頭氏が吉林ニ於テ歸順匪及警察員養成所ノ滿人ヲ検査シタモノヲ合算スルト、ヤハリ陽性率ガ高く、11—12 歳ニシテ既ニ 82.3%ノ陽性率ヲ示シタノデアル。

次ニ蒙古人ニ就テハ廣木氏等ガ農安地方ニ於テ調査シタ處ニヨルト、1—10 歳デ既ニ 58%陽性

デアツタ。而シ早川氏が海拉爾ノ蒙古軍人ニ就テ検査シタノデハ、17—32 歳デ 53.8% 陽性デ、比較的の低率デアツタ。地方ニヨツテ陽性率ノ高低アルハ當然デアル。

白系露人ニ於テハ箭頭氏等ガ哈爾濱市内小學校生徒ニ就テノ調査デ男子 62%、女子 62.9%ト云フ相當高イ陽性率ヲ認メタ。

今年ノ冬東京帝大ノ西野氏一行ガ三河地方ノ白系露人ヲ調べタ結果ハ小學兒童男子 51.5%、女子 45.0%デ田舎デモ相當高率デアルガ、要治療的の活動性結核ハアマリ無ク、其土地ノ人ノ話ニモ若クシテ結核デ死ヌ様ナ例ハ殆ンド無イトノコトデアル。

新義州ト安東トノ比較調査 朝鮮ノ新義州ト滿洲側ノ安東トハ鴨綠江ノ川一筋隔テ丈ケデ氣候ニ大差無ク、其建築様式等ニハ相當ノ差ガアルノデ、結核感染状態ニハ何等カノ相異ガアリハセヌカト以前カラ考ヘテ居ツタ處、此程滿鐵側ト朝鮮總督府側ト協同調査ヲ開始スルコトガ出來タ。即チ新義州ヘハ秋月氏ガ行キ、新義州衛生課ト協同シテ内地人及朝鮮人ノ小學生ヲ検査シ、安東デハ安東滿鐵醫院ノ遠藤賢氏ガ主トシテ調べタノデアルガ、其結果ハ第 22 表ノ通り、

第 22 表 新義州ト安東ノ小學兒童「ツ」反應陽性率

地名 學年	内地人		朝鮮人	
	新義州	安東	新義州	安東
1	26.7	21.6	51.0	53.7
2	29.6	25.7	53.9	56.3
3	26.1	30.7	63.7	60.4
4	41.5	28.8	63.8	65.3
5	37.4	40.6	71.9	69.3
6	38.7	38.1	77.8	71.2
計	33.2	30.9	63.7	62.7

内地人デハ新義州ガ稍々高率、朝鮮人デモ多少其傾向ガアルガ、其差ハ僅少デア。安東デモ新義州デモ朝鮮人ハ内地人ニ比シテ殆ンド2倍ノ高率ヲ示シテ居ル。然シテ低學年カラ相當ニ高率デアル事ガ特長デア。然シナガラ治療ヲ要スル活動性結核患者ノ數モ之ニ伴ツテ朝鮮兒童ノ方ニ多イカト云フト、之ハ全く別問題デアツテ、自分ハ朝鮮兒童ニ於テハ「ツベルクリン」陽性者ハ多クトモ、活動性結核ノ率ハ日本兒童ヨリモ低イデアラウト云フ豫想ヲ持ツテ居ルガ、夫ハ「レントゲン」検査ノ完了セヌ今日勿論斷言出來ナイ。唯然シ安東ニ於テ遠藤賢氏、新義州ニ於テ秋月正一氏が「ツベルクリン」陽性兒童ノ血沈ヲ檢シタ成績ハ次表ノ如ク、検査兒童總數ニ對スル血沈1時間 20mm 以上ノ兒童ノ率ガ朝鮮兒童ノ方低イノデア。尤モ此血沈促進者ガ皆結核患者デアルトハ限ラズ。又促進セヌ者ノ内ニ活動性結核ガ無イトモ云ヘヌガ、前述ノ豫想ニ向ツテ近ヅイテ居ル如キ感ガアル。切ニ「レントゲン」検査ノ完了ヲ待ツ次第デア。

第 23 表 内鮮「ツ」反應陽性學童ノ血沈促進例比較(尋常小學ノミ)

	内地人			朝鮮人		
	検査數	1時間 20mm例	共%	検査數	1時間 20mm例	共%
新義州	333	54	16.2	2390	370	15.5
安東	629	141	22.4	1206	152	12.6
合計平均	962	195	20.3	3650	522	14.3

倍テ滿洲ニ於ケル結核感染率ハ漸次高マリツ、アルカ或ハ降リツ、アルカト云フニ勿論マダ不明デア。札幌市ノ學童ノ「ツ」反應陽性率ハ昭和9年ニ於テ37.8%デ13年前ニ比シ11.2%ノ低下ヲ示シタト金井、清水兩氏が報告シテ居ル。滿洲デハ此種ノ報告ガマダ出來ナイノヲ遺憾トスル。唯小松、山田兩氏等ガ昭和13年2月ニ小學校入學2ヶ月前ノ兒童ニ行ツタ成績ハ26.9%陽性デアツタノニ、其翌年同様ノ検査ヲ同條件で行ツタ山田、惣中兩氏ノ成績ハ20.0%ニ低下シテ居ツタ。僅カ1年間ニ6.9%ノ差ヲ生ジタノハ恐ク偶然カト思フガ、然シ近年ニ於ケル大連市民ノ結核豫防智識ノ向上ト療養施設ノ擴充等ヲ考ヘルト、或ハ最早ソロソロ陽性率減退ノ傾向ガアルノカモ知レヌト思フ。但シ實際斯様ノ傾向ガアツタトシテモ昨今ノ様ナ住宅難等ノ不良條件ニヨリ此傾向モ逆轉スルコトヲ恐レル。兎ニ角之ハ興味アル今後ノ問題デア。

第 4 節 街路上喀痰検査成績

滿洲ニ於ケル此方面ノ検査ト東京市ニ於ケルモノトヲ比較シテ見ル。

第 24 表 街路喀痰検査成績

地名	検査者	地域	喀痰數	結核性菌例	陽性率(%)
奉天	滿大微生	鐵道附屬地	670	3	0.3
		城内、商埠地	326	8	2.4
		合計	1006	11	1.1
撫順	大竹	撫順事務所前停留所	173	15	9.7
哈爾濱	星崎	傅家甸	605	10	1.65
		埠頭區	521	19	3.65
		新市街	141	0	0
		合計	1267	29	2.29
東京市	警視廳醫務課	省線社線驛並附近道路	216	5	2.3
		市電停留所及附近街路	211	5	2.3
		興行場及附近街路	220	7	3.2
		デパート及附近街路	121	4	0.3
		中等學校及附近街路	222	2	0.9
		病院及附近街路	102	1	0.9
合計	1092	24	2.2		

アマリ著シイ差異ハ認メメガ、滿洲ニ於テハ滿人ガ手鼻ヲカム習慣ガアルノデ、街路ノ鼻汁ヲ喀痰ト間違ヒテ検査シタ例モアルデアラウ。夫ヲ完全ニ除外シ得タナラバ、結核菌發見率ハ更ニ高クナル可能性ガアル。少クトモ滿洲ノ都市ニ於テ東京ヨリモ有結核菌喀痰ガ少數ダトハ認メラレナイ。

滿洲自體ニ於テハ、滿人密集地域デ特ニ陽性率ノ高イ事ハ著シイ事實デアアル。撫順ニ於テ特ニ高率デアツタノハ偶々其停留場附近ニ開放性患者ガ居住シ、毎日電車ニ乗り降りシタノデアラウト戸田忠雄教授ニ評シテ居ル。

要スルニ滿洲ハ内地ノ大都市ト同等以上ノ汚染度ヲ有スト見做シテヨイト思フ。

第 5 節 動物ニ於ケル結核

滿人ノ廣木氏ノ研究ヲ簡單ニ紹介スル。同氏ハ

奉天ニ於テ外觀上、不健康ナ鶏ヲ 34 羽剖檢シタ結果、6 羽即 17.7%ニ著明ノ全身結核ヲ見タ。

牛結核ニ就テ奉天ノ滿鐵屠畜場ニ於テ 5 ケ年間ニ 4.0%デアツタ。輕症ヲ入レ、バ更ニ多イトノコトデアアル。

豚結核ハ牛結核ニ次デ多イ。廣木氏ハ奉天ニ於テ 1.05%ノ割合ニ檢出シタ。同氏ハ 23 株ノ結核菌ヲ分離シタ處、其内 17 例ハ牛型、5 例ハ人型、1 例ハ弱毒牛型ト報告シテ居ル。

犬結核モ同氏ハ 2 年間ニ 4 例見テ居ル。ソシテ 1 例ノ犬結核カラ分離シタ菌ガ明カニ人型菌デアツタト報告シテ居ル。

此動物結核ノ研究、夫ト人類トノ關係、滿洲ト内地トノ差異等ニ就キ今後更ニ研究ノ出ルコトヲ期待スル次第デアアル。

第 2 章 滿洲開拓地ト結核

我國ハ 20 ケ年計畫ヲ以テ日本開拓民ヲ 100 萬戸 500 萬人移住セシムル事ヲ既ニ決定シ、著々實行シツ、アル。云フマデモナク是等開拓民ノ健康ハ極メテ重要デアツテ、就中結核ニ對シテ多大ノ關心ガ持タル。

既ニ妻帯セル開拓民ニハ續々第 2 世タル子供ガ生レルガ、若シ開拓民ノ間ニ結核ノ蔓延ヲ見ルニ至レバ、植民ノ目的ハ全然水泡ニ歸スル。

又青少年義勇隊ト稱スル若キ開拓士ハ恰カモ結核ノ好發年齡期デアル事ト集團生活者ナルガ故ニ、結核問題ハ一段ト重大視サレルノデアアル。猶是等青少年及拓地農村ノ家族ニハ結核未感染者(「ツ」反應陰性者)ガ相當數存スルコトモ留意スベキ點デアアル。

第 1 節 青少年義勇隊ノ結核

死亡率

南滿洲保養院ノ秋月氏ハ今年初牡丹江省ノ吉山、太嶺、紫陽ノ訓練生ヲ検査シタガ、是等ハ

昭和 13 年ノ春茨城縣内原訓練所ニ入り、間モナク勃利及寧安ノ大訓練所ニ移リ、昭和 14 年春現在ノ小訓練所ニ入植シタ處ノ 16—22 歳ノ青年デアアルガ、全員 900 名ノ内 7 名結核デ死亡シ 1 年 3.5 名ノ割合デ、人口 1000 ニ付 3.9%ニ當ル。

日本内地昭和 10 年度ノ年齢別結核死亡率ハ 15—19 歳ハ 4.4% 20—24 歳ガ 5.5%、此平均 5.0%デアアル。又是等青年ノ出身地石川縣ノ中學校生徒結核死亡率(退學後ノ死亡者ハ入ラヌ)ハ 4.7%デアアルカラ、是等ト比較シテ訓練所ノ結核死亡率ガ高イコトハナイ。

義勇隊ノ患者ヲ收容スル哈爾濱中央病院ハ 29 ケ所ノ訓練所カラ患者ヲ收容シタノデアアルガ、昨年 4 月 1 日以來 8 ケ月間ノ結核死亡者 33 名デ隊員總數ニ對スル率ハ高クナイ。

又滿鐵々道自警村訓練所生徒 6000 名強ノ内昭和 14 年度ノ結核死亡者 14 名(2.3%)デアツタ。

第2節 青少年義勇隊ノ結核罹病率

昭和14年2月初自分ガ吉林省取柴河ノ自警村訓練所ニ出張シタ際ノ調デハ在籍者98名中肺浸潤ノ病名デ内地ニ歸還中ノ者ガ2名アツタガ、他ニ疑ハシイ患者ハ無ク、皆元氣デアツタ。受見ヲ申出ル者無ク、強制的健康診断ハ行ハナカッタ。猶錦州省ノ馮家訓練所ハ在籍者99名ノ内1名肺尖「カタル」デ入院中デアツテ、他ニハ現在結核疾患デ休養乃至醫療中ノ者ハ1名モナク、何レモ元氣デアツタ。但シ肋膜炎ノ既往症アル者2名ト背痛アル者及血色ノ佳良ナラザル者各1名診察シタガ、彼者ハ理學の所見無ク、前記2名ハ多少ノ理學の變化アリ、過勞ヲ戒メ且ツ「レントゲン」血沈等ノ検査ヲ勸メテ置イタ。是等ガ活動性結核デアルト假定スレバ入院中ノ者ト合シテ4名即チ4%デアル。

次デ秋月正一氏ガ今年初吉山、太嶺、紫陽ノ3訓練所ニ於テ調査シタ處ニヨルト、結核性疾患ト認メラレルモノ33名之ニ其疑アルモノ7名ヲ加ヘテ40名デ全員ノ4.4%デアルカラ甚シキ高率トハ云ヘヌ。

又訓練生中「ツ」反應陽性者ノ血沈検査ノ成績ハ1時間21mm以上ノ促進例14名デ検査員298名ニ對シ4.8%ニ相當スル。

南滿洲保養院東分院長木下芳人氏ガ、今年初寧年、哈川、成吉思汗、大和、馮家ノ5訓練所ニ於テノ調査デハ、在籍者總數1487名中結核性疾患ニテノ入院者18名、内地療養者9名、計27名(1.8%)デアツタ。猶血沈測定者1257名(「ツ」反應陰性陽性共)中1時間20mm以上ノ促進者35名(2.78%)ニ過ギナカッタ。活動性結核例ノ多ク無イ事ガ想像出來ル。

第3節 青少年義勇隊ノ「ツ」反應

滿洲ノ青少年義勇隊ハ先ヅ茨城縣内原ノ訓練所ニ入りテ訓練ヲ受ケルノデアルガ、其内原ニ於テ坂口内科ノ太田健三氏ガ大規模ノ「ツ」反應検査

ヲ遂ゲテ之ヲ發表シテ居ル。夫ニヨルト年齢ハ15歳—20歳主ニ16—19歳デ「ツ」反應陽性率ハ最低ノ宮城縣出身者ノ14.9%カラ最高大阪府出身ノ72.4%、全人員平均28.4%デアル。

倍テ夫等ノ青少年ノ入滿後ノ健康ト陰性者ノ陽性轉化率ノ検査ハ興味アル事ト考ヘル。南滿保養院ノ秋月正一氏ハ今年1月末カラ吉山、太嶺、紫陽ノ3訓練所ニ於テ生徒ノ「ツ」反應ヲ檢シ、陽性率平均47.9%ナルヲ知ツタ。然ルニ内原デハ平均28.4%デアツタカラ約2ヶ年間ニ19.5%増シタ事ニナル。即チ1年ニ9.8%デアル。大阪府ノ19—20歳ノ青年ニ就テノ貴島氏ノ報告ニヨルト69.1%村落ノミデモ67.5%デアルカラ前記訓練所ノ47.9%ノ方ガ低率デアル。

又吉山訓練所デハ全部石川縣出身者デ2ヶ年間ニ4名ノ結核死亡者ヲ出シタガ「ツ」反應陽性率51.6%デアツタ。然ルニ太田氏ノ調査ニヨレバ内原時代ノ同縣人ハ35.2%ノ陽性率デアツタカラ、1ヶ月平均0.8%ノ陽性轉化デアツテ決シテ驚クベキ高率デハナイ。

尤此吉山ノ第4小隊ハ結核死亡者4名出シタ組デアルガ、ソノ小隊ハ他ノ小隊ニ比シテ斷然「ツ」反應陽性率ノ高イ事ハ興味アル事實デアル。

是ト同様ノ事ヲ奉天保養院ノ富田氏モ觀テ居ル。即チ同氏ハ北滿4ヶ所ノ訓練所ヲ検査シ其内追分訓練所デハ6ヶ小隊ノ中第1小隊ノ陽性率ガ他ノ5ヶ小隊ノ平均33.8%ニ對シ82.1%ト云フ高率ヲ示シタノデアルガ、此第1小隊ニハ肺結核患者ガ1人アツテ牡丹江病院ニ入院シテ間モ無ク死亡シタト云フ小隊デアツタ。

又南滿保養院東分院長木下氏ハ龍江省ノ寧年、哈川、興安南省ノ大和、錦州省ノ馮家ノ5訓練所ノ調査デ、平均36.5%ノ陽性率ヲ見タ(年齢ハ17—21歳)。猶陽性轉化率ハ6ヶ月間ニ12.4%1ヶ月平均2.0%デアル。

次ニ新京保養院ノ山口氏ハ吉林局管内ノ河灣子小姑家、柳樹河、取柴河ノ4訓練所ニ就テ検査シ34.4—42.5%ノ陽性率ヲ見タノデアル。而シ

第 25 表 青少年義勇隊「ツベルクリン」反應陽性率%

(1) 秋月氏調

小隊名 地名	I	II	III	IV	V	VI	VII	計	血沈 1 時間 21mm 以上ノ例
吉 山	11.3	17.3	54.5	74.3 (4)	43.1			51.6	1
太 嶺	72.2 (1)	55.6 1	35.6 1	52.5 1	13.6	32.6		45.9	3
紫 陽	36.1	30.0	38.1	60.3	32.6	37.3	23.3	46.3	10
平 均								47.9	14 (4.8%)

備考 () 内數字ハ其小隊ノ結核死亡者數ヲ示ス

(2) 木下氏調

地名	検査人員	陽性率 (%)	6ヶ月間 陽轉率 (%)	血沈検査 (1257名)
寧 年	294	31.6	10.9	1時間値 21mm以上 ノ促進者 35名 2.8%
哈 川	269	43.3	19.7	
成吉思汗	263	46.0	14.9	
大 和	309	20.7	4.2	
馮 家	168	40.5		
計	1303	36.5	12.4 月平均 2.0	

(3) 富田氏調

地名	人員	陽性率 (%)	20ヶ月間 陽轉率 (%)	1ヶ月平 均陽轉率 (%)
追 分	279	41.6	21.5	1.1
虎 山	276	27.5	8.3	0.1
青 山	215	40.8	19.0	1.0
楊 木	277	59.9	42.2	2.1
計	1077	42.9	22.8	1.1

(4) 山口氏調

地名	検査人員	陽性率 (%)	9ヶ月間 陽轉率 (%)	1ヶ月平 均陽轉率 (%)
河灣子	264	36.0	13.4	1.5
小姑家	252	34.4	13.2	1.5
柳樹河	223	42.5		
取柴河	151	35.8		
合計	880	37.2	13.3	1.5

(5) 東大大陸衛生研究會調

地名	検査人員	陽性率	年 齡
鐵 驢	272	25.0%	14—19歳

テ河灣子訓練生ニ就テ9ヶ月間ノ陽性轉化ガ13.4%、即チ月平均1.5%デアロコトヲ確カメタ。

猶東大ノ大陸衛生研究會テ調査シタ鐵驢訓練所ノ生徒ハ14—19歳デ、若イ關係デモアラウガ平均25%ト云フ低イ陽性率デアツタ。

之ヲ要スルニ滿洲全體トシテハ日本人ノ結核罹病率及死亡率ハ内地ヨリ高イノデアルガ、此青少年義勇隊ニ於テハ滿鐵關係ノ訓練所ノ調査ニ關スル限り今ノ處結核罹病率モ死亡率モ特ニ高イト認ムベキ根據ハ無イ。

坂口教授及其門下ノ諸氏ガ適切ナル努力ニヨリ、内原訓練所ニ於テ嚴重ナル健康診斷ヲ行ハレタ結果デアラウト、敬意ヲ表スル次イデアル。勿論此拓殖事業ノ創始當時ニ於テハ健康診斷不充分ノ事モ有ツタデアラウカラ、渡滿匆々發病シ且ツ同僚ニ感染セシメタ例モ有ツタノデアルガ、既ニ健康診斷ノ手配モ略々完了シ、「レントゲン」検査モ間接撮影法ノ應用等ニヨリ著々行ハレ、其外「ツ」反應陰性者ニ對スル BCG 接種モ行ハレルノデアルカラ、今後ノ發病率ハ一層減少スルデアラウ。又渡滿後ノ醫療施設ニ於テモ漸次完備サレルノデアルカラ、今後ハ結核罹病者發見モ早クナリ、嘗テ見タル如キ開放性患者ヲ知ラズニ集團生活ヲナサシムル如キ危險ハ大ニ減ズルデアラウト信ズル。

第 4 節 鐵道自警村ノ結核

自分ハ昭和14年1月カ2月ニカケテ吉林省

及錦州省ノ鐵道自警村ヲ巡リ、不完全ナガラ實情ヲ調査シタ處、結核デ死亡シタ者、入院中ノ者歸國シタ者ナド少シハアリ、現ニ疑ハシイ症狀ノ者モ有ルガ、然シ著シク多イトモ思ヘヌ程度デアツタ。入植前ノ健康診斷ガ殆ンド缺如シタノデアルカラ、少シノ發病者ハ勿論當然デアル。今後ハ渡滿前ノ健康診斷ヲ勵行シタイモノデアル。

吉林省ノ日月城自警村ハ戶數10戶デアルガ、其1戶ノ主人ガ開放性肺結核患者デアツタ。而シ自覺的症狀殆ンド無ク、稀ニ喀痰アルモ、毎

日雪ヲ踏ンデ山ヘ伐木ニ行キツ、アルト云フノヲ診察シテ見ルト、僅カニ理學的變化アリ。喀痰検査ノ結果結核菌ヲ證明シタノデアル。

ソシテ當時其妻ハ妊娠中デ臨月デアツタカラ棄テ置ケバ第2世タル子寶ヲモ犠牲ニシテ國策ニ反スル譯アアルノデ速カニ患者ヲ奉天保養院ニ入院セシムルコトニシタ次第デアル。

開拓地ノ結核問題ハ其使命カラ觀テ、特ニ重要視セネバナラヌ事ガ此1例ニヨツテモ明カデア

第3章 滿洲ニ於ケル結核ノ病型

第1節 肺結核ト其他ノ結核

トノ比率

嘗テ伍連德氏等ハ北平、上海、濟南デハ肺結核ガ他ノ結核ニ比シテ非常ニ多イノニ、哈爾濱ニ於テハ、肺結核ガ全結核ノ18.1%ニ過ギズ、腺結核、骨結核等ノ外科的結核ガ多イト報告シタノデアルガ、其後哈爾濱市衛生指導隊ノ井之川氏ノ統計報告ニヨルト、北鐵衛生處患者中滿人ハ肺結核ガ全結核ノ70.6%、露人デハ92.1%トナツテ居リ、伍連德氏ノ報告ト大分違フノデ

アル。

自分ハ近年ニ於ケル關東州及鐵道附屬地ノ日滿人ニ就キ5ケ年間ノ統計ヲ取り、呼吸器結核ト其他ノ結核トノ割合ヲ見タガ、滿人デハ肺結核對他結核ノ割合ガ9對1デアルノニ、日本人デハ其比ガ滿人ヨリ小サク、殊ニ附屬地ニ於テハ7對3トナツテ居ル。是ハ日本人ガ肺結核ノ病名ヲ厭フ爲メカ、或ハ又肺結核ノ患者ハ他ノ結核患者ヨリモ多ク内地ニ歸還スルノカ、夫等ノ理由ニヨルコトモカナリ考ヘラレ、必ズシモ本質的ノ差異トハ斷言出來ヌ。

第26表 滿洲ニ於ケル結核死亡率病類比

人種	年次	昭和8年		昭和9年		昭和10年		昭和11年		昭和12年		平均	
		呼吸器	其他	呼吸器	其他	呼吸器	其他	呼吸器	其他	呼吸器	其他	呼吸器	其他
	地域	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)
日本人	關東州	78.0	22.0	78.0	22.0	72.0	28.0	75.4	24.6	76.6	32.4	75.6	24.4
	附屬地	73.8	26.2	68.7	31.3	72.2	27.8	69.1	30.9	65.3	34.7	69.6	30.4
滿人	關東州	91.4	8.6	91.3	8.7	91.6	10.9	92.2	7.8	90.3	9.7	90.5	9.5
	附屬地	92.8	7.2	91.3	8.7	91.8	11.4	88.0	12.0	87.1	12.9	90.2	9.8

備考 呼=呼吸器結核(氣管及氣管枝淋巴腺結核ヲ含ム)
其他=其他ノ結核

然シ一方肋膜炎及腹膜炎ガ日本人ニ多イ事ハ著シイ事實デアル。此關係ハ臺灣ノ内地人ト本島人トノ關係ニ酷似シテ居ル。今臺北ノ小田教授ノ調査ト滿大ノ西山氏ノ調査トヲ表示スレバ次ノ通りデアル。

第 27 表 人種別肋膜炎罹患率。

地名	滿 洲		臺 灣	
	滿大内科 (入院) 昭2—昭11	滿人	臺北醫院 (外來) 大正14—昭9	本島人
總患者數 I	9642	1767	44274	22741
總結核患者 II	2355	391	2473	1292
Iニ對スル IIノ(%)	24.4	22.1	5.6	5.7
IIニ對スル肺結核(%)	58.8	64.2	70.9	76.4
IIニ對スル肋膜炎(%)	26.9	14.8	24.4	17.7
IIニ對スル肋膜炎及腹膜炎(%)	36.1	26.3	26.3	1.89

猶滿洲國陸海軍患者統計(昭和10年、康德2年)ニヨレバ、胸膜炎ハ平均4.65(兵員毎1000比例)デアルガ、關東軍ニ於テハ同年度23.2ヲ示シ約5倍ニ相當スル(椰野大佐ニ據ル)。

次ニ大連ノ赤十字病院ノ昭和14年度ノ外來統計デハ、肺ノ結核性疾患ガ81.8名デアルニ對シ、肋膜炎ハ169名デ、兩者合計數ノ17%ニ相

當スル。然シ入院患者統計デハ肋膜炎ガ31%ヲ占メル。植民地ノ日本人ハ肺結核、肺浸潤、肺炎「カタル」等比較的慢性ノ疾患デハ内地ニ歸ル者ガ多ク、肋膜炎ニ割ニ急性ニ起リ、且又治療シ易イカラ内地ヘ歸ラス。從テ入院統計デハ肺ノ結核性疾患ハ實際ヨリ少クナリ、肋膜炎ノ割合ガ多クナル筈デアル。即チ入院統計ヨリモ外來統計ノ方ガ實際ノ罹病後ニ近イモノト思ハレル。

第 2 節 肺結核ノ病型

岩本氏ガ新京ノ滿鐵醫院内科患者ニ就テ調査シタ處ニヨルト、約4萬人中肺結核ガ13%デ其「レントゲン」線分類ハ次ノ如クデアル。

早期浸潤型	7.0%
肺門結核	23.0%
主滲出性	7.0%
主増殖性	49.0%
主硬化性	12.0%
血行撒布型	2.0%

即チ増殖性ガ滲出性ノ7倍デアツタ。

我々ノ保養院ノ昭和7—10年4ヶ年間ノ外來患者ノ「レントゲン」寫真ニ就キ1450名ヲ秋月氏が分類シテ見ルト、増殖性17.9%ニ對シ滲出性ガ25.8%デアツタ。

斯様ナ調査ハ検査者ノ標準ガ一定セヌカラ、比

第 28 表 南滿洲保養院患者病型別(「レントゲン」寫真ニヨル)

年齢	病型	新鮮初感染	陳舊初感染	濕性肋膜炎	肋膜癒著及肥厚	粟粒結核	滲出性	増殖性	硬化性	計
1—10		33	6	0	1	0	2	1	2	45
11—15		31	19	3	4	1	13	5	2	78
16—20		59	61	25	25	4	90	44	13	321
21—25		44	70	22	26	4	98	73	26	363
26—30		17	46	10	40	2	78	65	27	285
31—35		7	31	5	16	1	39	34	19	152
36—40		2	26	6	11	0	21	17	13	96
41—50		2	17	1	13	1	26	17	10	87
51—		1	4	1	4	2	7	2	2	23
計		196	280	73	140	15	374	258	114	1456
%		13.5	19.3	5.0	9.7	1.0	25.8	17.7	7.9	100

較が困難デアルガ、結核罹患率乃至死亡率ノ高い滿洲ニ於テハ滲出性病變ガ多イノデアラウト想像サレルノデアル。

猶滿洲ニ於テモ屢々所謂 Flüchtige Infiltration ト稱スル一過性ノ「レントゲン」陰影ヲ肺ニ見ルガアル。我々ノ保養院デモ外來及入院患者デ8例見タノデアルガ、其中ノ5例ハ現新京保養院長佐々虎雄氏が既ニ報告シテ居ル。内2例ハ結核性、3例ハ非結核性ト診断サレタモノデアル。小松雄吉氏ハ大連保健所ニ於テ3年間ニ64例見テ其一部分ハ既ニ結核病學會デ報告シタ。之等ノ一過性陰影例ノ中デ眞ノ浸潤デナク、限局性肋膜炎ノ例ナル場合モアルデアラウ。少クモ其區別ニ困難ナ例ガアル。又確カニ肺實質ノ浸

潤ニ起因スル陰影デアルニシテモ、結核ト無關係ナル浸潤例モ相當ニ多イ様ニ思ヘル。

夫故肺結核ノ「レントゲン」診断ニ當ツテハ、斯様ナ非結核性ノ浸潤ノ存在ヲモ念頭ニ置ク必要ガアル。從テ滿洲ノ肺結核病型ヲ云々スル場合ナドニモ、「ツ」反應陰性者ヲ除外シテ統計ヲ取ルガ必要デアル。尤モ「ツ」反應陰性デモ喀痰検査デ結核菌陽性ナル場合ナドハ勿論除外スル必要ハナイ。

偕肺結核ノ病型ガ滿洲ヤ臺灣ト内地ト如何ナル相違ガアルカト云フ事ニ就イテハ、同一ノ人ガ一定ノ見解、同一ノ標準ヲ以テ比較スルコトガ必要デ、今後何等カノ機關ニ於テ、統一的研究ヲ遂ゲテ解決スベキ問題デアルト思フ。

第 4 章 滿洲ノ氣候ト結核ノ關係

第 1 節 滿洲ノ氣象

滿洲ニ於テハ結核ノ罹病率モ死亡率モ高イト云フ事モ先ニ述ベタガ、然ラバ其原因ハ何カ、第一ニ考ヘラレル事ハ其氣候風土ガ然ラシムルニアラズヤト云フ事デアル。依テ先ヅ氣象ニ就テ檢討シテ見ル。

第 29 表 主要都市最低極氣溫

東 京	- 8.4	シカゴ	-27.8
ロンドン	- 9.6	旭 川	-30.0
パ リ	-15.4	奉 天	-32.9
京 城	-19.0	新 京	-36.0
大 連	-19.9	モスコウ	-37.4
札 幌	-20.1	哈 爾 濱	-40.0
ベルリン	-23.0	齊々哈爾	-44.0
ニューヨーク	-25.0	滿洲里	-46.9

此表ニ明カナル如ク、氣溫ノ點ニ於テ滿洲ノ諸都市ハ他ノ文明國ノ夫レニ比シテ非常ニ低イ。大連ハロンドンヤパリヨリモ低ク、奉天、新京ハベルリン、ニューヨークヨリモ低ク、ハルビンハモスコウヨリモ低ク、齊々哈爾、滿洲里等ハ更ニ低イノデアル。

斯クノ如ク氣溫ガ低イト云フ事ガ結核ヲ多カラシメ、且又其死亡率ヲ高カラシメル原因デアルヤ否ヤト云フニ、少クモ直接ノ原因ニハナラヌト信ズル。

若シ寒イ土地ニ當然結核ガ多ク或ハ治シ難イト云フモノナラバ、カナダノ如キ或ハフィンランド、スウェーデン、ノールウェーノ如キハヤハリ結核死亡率ガ相當高クナケレバナラヌノニ事實ハ之ニ反スル。就中カナダノ結核死亡率ハ温暖ナル日本内地ニ比シテ著シク低イ。

之等諸國ハ平均壽命ニ於テモ日本ヨリ長ク、總死亡率モ結核死亡率モ低イノデアル。

故ニ寒イト云フ事ガ當然結核ヲ多カラシメルト見ル事ハ出來ヌ。

又結核治療ノ經驗カラ云ツテモ、若シ寒イ事ガ結核患者ニ有害デアルナラバ、冬ノ開放療法ハ不成績ニ終リ、漸次衰微スル筈デアルガ、滿洲ニ於ケル吾々ノ經驗デモ、寒冷ナ開放療法ノ成績ガ良イ、患者ガ開放主義ヲ好ミ、寒冷ニ對シテ恐怖心ナド持タヌノデアル。

又寒サガ有害デアルナラバ、零下 30 度ニ達ス

ル北米ノサラナックレークハ如何ニ開發者ドクター・トルードウガ偉大ナル人格者デアツタニシテモ、今日ノ如キ大療養地ニマデ發展スル事ハ有リ得ナイ。

又スキスノ各高山療養所モ、トウニ閉鎖サレタ筈デアル。

之等ノ事實ヲ考ヘルナラバ、寒氣其物ガ滿洲ノ結核多數ノ直接原因デハナク、他ニ主ナル原因ガアル事ヲ想像セシメルノデルアル。

氣温以外ノ點ハ如何ト云フニ、健康ト大關係アル湿度ハ一般ニ低ク、1年平均70%以上ノ所ハ先ヅ滿洲ニハナイト云ツテヨイ。此ノ乾燥ノ爲ニ夏ハ割合暑熱ヲ感ゼズ、冬ハ低温度ノ割合ニ寒冷ヲ感ジナイノデアル。

次ニ風ニ就テハ、滿洲デモ時ニ相當強イ風ガ吹ク事ハ吹クケレドモ、内地ニ於ケル如キ暴風ハ殆ンドナイ。氣象觀測ガ行ハレ出シテ以來、未ダ嘗テ30米以上ノ風速ヲ示シタ事ガナイ様デアル。

殊ニ幸ヒナ事ニ冬季非常ニ氣温ノ下ル北滿ニ於テハ、冬季ノ風速ガ概シテ小サク、殆ンド無風ト云フベキ日ガ多イ事デアル。

猶滿洲一般ニ晴天ガ非常ニ多ク、快晴日數ガ1年100日以上ノ土地ガ多ク、小平島(南滿洲保養院所在地)ノ如キハ150日内外デアル。

斯ノ如ク快晴ニ恵マレタ土地ハ日本ハ勿論世界中ニモアマリ類ガナイ。スキスノダヴォス以上ト云ヒ得ル。

第 30 表 各地氣象比較表(昭和8—12年5ヶ年平均、但シダヴォスノ年次不明)

種 別	地名 保養院 小平島)	大連市	大 分	下ノ關	茅ヶ崎	東 京	札 幌	ダヴォス
平均氣温	10.8	10.1	15.0	15.1	14.3	14.3	7.3	2.6
平均湿度(%)	62	64	77	73	75	72	77	77
快晴日數	149	106	40	44	75	55	21	143
日照時(%)	65	63	51	45	48	47	40	53
降水日數	56	73	134	149	138	135	203	187
降水量	558	548	1584	1583	1484	1381	1132	941
曇天日數	69	91	138	156	136	174	184	113

第 31 表 南滿洲保養院氣象統計(自昭和8年 5ヶ年平均)
至昭和12年

		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	平均或ハ 1年全數
氣 温	平 均	-4.5	-2.0	1.7	9.2	15.8	19.3	23.7	23.9	21.0	15.1	6.9	-0.5	10.8
	最高極	6.1	6.6	9.6	19.4	27.2	28.8	32.6	29.5	28.6	26.8	17.4	8.6	20.1
	最低極	-14.9	-11.8	-8.5	0.8	6.1	11.9	17.6	16.8	11.2	3.3	0.3	-12.0	1.7
風 速	病棟屋上	4.3	4.1	4.0	4.0	3.4	2.4	2.3	2.7	3.4	3.5	4.4	3.8	3.5
	最大風速	13.1	12.3	16.6	15.4	13.4	14.2	10.6	11.6	12.4	14.0	18.8	16.0	14.0
	病棟前	1.0	0.5	1.6	2.0	1.6	1.1	1.3	1.1	1.1	1.4	1.4	1.0	1.2
温 度(%)		53.1	56.4	55.5	53.6	56.8	79.1	82.1	68.5	65.2	56.4	55.3	58.2	61.7
日照時數		227.0	212.9	253.7	262.5	284.5	274.2	238.1	235.8	265.4	296.6	203.8	194.7	2,949.2
日照率(%)		74.9	70.3	69.0	66.4	63.6	60.2	57.5	65.0	69.3	71.6	65.6	67.5	66.7
快晴日數		19.2	15.2	14.0	12.0	13.6	8.4	4.6	9.2	11.4	15.6	11.8	12.0	146.7
曇天日數		2.4	2.8	4.8	5.6	5.6	8.2	11.4	9.2	6.8	4.2	4.4	3.8	69.2
降水日數		2.2	2.0	3.2	3.4	4.2	6.2	9.4	7.8	5.4	3.6	4.2	3.4	55.0
降水量		2.3	4.0	10.3	26.8	36.2	59.2	160.8	108.4	73.0	33.4	24.1	14.8	553.3
病室温度	平 均	4.4	5.1	6.5	10.7	16.0	19.4	22.9	23.7	21.0	16.1	10.0	4.7	13.4
	最高極	14.5	15.3	15.5	17.8	24.8	25.4	29.2	28.1	25.3	22.9	17.8	13.2	20.8
	最低極	-5.5	-3.3	0.2	3.1	8.9	14.0	18.4	19.8	15.1	7.6	0.2	-1.5	6.4
病室湿度(%)		46.5	41.1	47.5	61.9	54.4	67.1	72.2	56.9	59.1	53.2	46.3	38.8	53.7

斯ノ如ク假令氣温ハ低クトモ晴天ガ多ク、空氣ガ乾燥シ、然シテ風ガアマリナイト云フコトニヨリ、寒暖計ノ示度ト實際ノ寒冷感トノ間ニ非常ナ相異ノ存スル事ニ重大ナル意義ガ有ル。

徒ラニ氣象報告ノ氣温ノ低サノミヲ見、内地ノ濕潤ナル土地ニ於ケル概念ヲ以テ、滿洲ノ氣候風土ヲ批判スルナラバ、夫ハ大キナ誤デアル。北海道ヤ東北、北陸地方カラ滿洲ノ開拓地ニ入ツタ人々ノ實感ヲ聞クト、滿洲ノ寒サハ意外ニ凌ギ易ク、寒暖計ヲ見テ其低サニ驚キ、寒暖計ヲ疑フト云フ者ガ少クナイ。

實際札幌ト大連トハ冬ノ氣候ガ大體等シイガ、其寒冷感ニ於テ大連ノ方ガ凌ギ良ク、奉天ハ旭川ヨリモ冬ノ氣温ガ低イガ、實際ノ寒冷感ハ旭川ヨリ輕イノデアル。

自分ハ昭和 14 年 2 月初、吉林省ノ明城ト云フ開拓地ニ於テ、朝起キ抜ケニ戶外ニ出テ、裸體操ヲ 5 分間行ツテ甚タ爽快ニ感ジタノデアルガ、此時傍ニ置イテアツタ寒暖計ハ零下 34 度ヲ示シタノデアル。之ハ全ク空氣ノ乾燥ト無風ノ爲ニ凌ギ良イト云フコトヲ如實ニ物語ルモノデアル。

前述ノ如ク滿洲ハ快晴ガ多ク、殊ニ冬季ニ於テ夫レノ著シイ事ガ特長デ、誠ニ幸ヒナ事デアルガ、紫外線ノ量ニ就テ嘗テ滿大ノ遠藤賢氏ガ調査シタ處ニヨルト、奉天ニ於テハ冬季ノ紫外線量ガスキスノダヴ、ス等ト略々同ジデ、ロンドンヤトロント或ハ日本ノ金澤、倉敷ナドヨリモ豊富デアルコトガ明カトナツタノデアル。奉天ト云フ大都市ニ於テサヘダヴ、スノ如キ山村ニ匹敵スルノデアルカラ、滿洲ノ都市以外ノ煤煙、塵埃ノ極メテ少イ地方ニ於テノ紫外線ハ如何ニ豊富ナルベキカ想像ニ難クナイ。

滿洲ノ寒氣ガ決シテ日本人ノ生活ニ不適當デナイト云フ事ハ京大ノ正路教授或ハ名大ノ久野教授其他ノ生理學者ヤ京大ノ戸田教授、滿大ノ三浦教授等ノ衛生學者モ著シク主張スル所デアル。

又久野教授ノ寒冷ニ對スル皮膚鍛鍊ノ效果ニ關

スル實驗ニ徴スルモ、吾人ノ皮膚ハ鍛鍊ニヨツテ驚クベキ耐寒性ヲ獲得出來ルモノデアルカラ、吾人ハ滿洲生活ノ必要條件トシテ寒冷ニ對スル鍛鍊ニ意ヲ用ヒル事ト、寒氣ヲ恐レヌ信念ヲ持ツ事ガ必要デアル。

第 2 節 煤塵ノ問題

滿洲ノ氣象ニ關聯シテ問題ニナルノハ煤煙及塵埃デアル。滿洲ノ諸都市ハ冬季煤煙ガ非常ニ多イ。其爲ニ析角快晴ニ惠マレタ空モ曇リ、紫外線ガ地上ニ到達セヌ場合ガ多イノデ、之ガ保健上非常ナ損害デアル、只サヘ日照時間ノ短イ冬ノ空ガ煤煙ニ掩ハレテ所謂 Ultravioletnacht (紫外線ノ暗夜)ヲ作ルコトナル。

第 32 表 各地降煤量 (田中文甫氏)

地名	調査年次	1 年間降煤量 噸/哩 ²
小平島(保養院)	1933-4	126
大連市	..	374
奉天市	..	361
新京市	..	447
本溪湖	..	1320
大阪市	1930	306
ロンドン	1931-2	266

此表ヲ見ルト、嘗テ煤煙ト尙儂病デ有名デアツタ處ノロンドンヨリモ大連、奉天、新京等ノ煤煙ガ多イノデアル。本溪湖ハ工業町デアル爲ニ特ニ甚ダシイ。

然シナガラ此煤煙ナルモノハ云フマデモナク、決シテ自然ノ氣象其物デナク、全ク人工的ニ作ルモノデアル。從テ人工的ニ之ヲ減ゼシメル事モ出來ル筈デアル。住民ノ理解ト努力ニヨリ此煙害ヲ減退セシメ得ル事、ロンドンヤ大阪等ノ

第 33 表 煤煙防止運動ノ效果(田中文甫氏)

地名	煤煙防止規則發布	1ヶ月平均降煤量 噸/哩 ²			減少率
		1914	1923	1932	
ロンドン	1891	34	24	22	約 1/3 トナル
グラスゴー	1892	55	27	21	約 1/4 トナル
大阪	1932	---	61	31	約 1/2 トナル
滿洲	1937	---	---	---	---

實例ニ徴シテモ明白デアル(第 33 表)。

既ニ滿洲ニ於テモ煤煙防止法規ヲ發布シ、官民共ニ努力シツ、アリ、將來漸次改善サレル事デアアル。

吾々が年來提唱シツ、アル冬季高温生活排撃ハ、當然ノ結果トシテ、石炭ノ消費量ヲ減ジ、同時ニ又煤煙ノ量ヲモ減ジツ、アル次第デアアルガ、煤煙防止ノ具體方法トシテハ此外燃焼器具

ノ改良、燃料ノ改善選擇、燃焼技術ノ改善等ガ必要デアツテ、夫々専門家ニヨツテ努力サレツツアル。

次ニ塵埃ノ問題デアルガ、滿洲ノ都市ニ塵埃ノ多イ事モ事實デアアル。即チ表ニ示ス如ク、大連市中心ノ商店街ハ保養院所在地小平島ニ比シテ 10 倍内外ノ煤塵量デアアル。

第 34 表 大連市内各所降下煤塵量比較(1 平方哩當リ噸數)

(昭和 13 年 1 月ヨリ 3 月迄 3 ヶ月分及昭和 12 年 1 ヶ年分) (田中文甫氏)

地 域 期 間	小 平 島 保 養 院 (郊外)	衛 生 試 驗 所 (市ノ中心ヨリ西南)	沙 河 口 (市ノ中心ヨリ西商店街)	小 崗 子 (市ノ中心ヨリ西北商店街)	浪 速 町 (市ノ中心商店街)	山 縣 通 (市ノ中心ヨリ北會社街)	楓 町 (市ノ中心ヨリ東住宅地)	桃 源 臺 (市ノ中心ヨリ南住宅地)
1, 2, 3 冬 3 ヶ月	52.23	168.26	252.42	369.56	469.68	355.95	147.58	279.68
月 平 均	17.41	56.09	84.14	119.85	156.56	118.65	49.19	93.23
昭和 12 年 1 ヶ年分	190.00	529.52	912.33	2197.61	1456.64	1026.03	492.92	1191.22

此塵埃ガ直接ニ呼吸量ヲ害スル事ニモナルガ、更ニヨリ以上ノ弊害ハ塵埃ヲ厭ツテ窓ヲ閉ヂル事デアアルカト思フ。

何レニシテモ此塵埃ノ大部分ハ都市其物カラ發生スル塵埃デアツテ、所謂蒙古風ト稱スル遠方カラノ黃塵ハ世人ノ考ヘル程實際ニハ頻繁デナク、年平均 9 回ニ過ギナイト云フ事デアアル。

此都市自體カラ發生スル塵埃ハ煤煙ト同様、ヤハリ住民ノ努力ニヨリ、即チ道路鋪裝又ハ塵埃處理法ノ改善、撒水或ハ洗條、植樹造林等ニヨリ改善サレル筈デアアル。文明都市トシテサウナケレバナラヌ事デアアル。

之ヲ要スルニ滿洲ノ天然自然ノ氣象關係ハ決シテ結核ヲ必然的ニ多カラシメル様ナ不良ナモノデナイト信ズル。否日本以上ノ結核療養地モ有ルト斷言スルモノデアアル。

第 3 節 季節別結核死亡率

滿洲ノ氣候ガ結核ノ經過ニ如何ナル影響ヲ及ボスカト云フ事ヲ知ル一端トシテ、季節別死亡率ヲ見ル事トシタ。

滿洲デハ關東州及附屬地、大連市、南滿洲保養院ノ結核死亡率、内地ノ比較ニテハ日本全國、東京市療養所ノ夫レヲ舉ゲテ第 35 表トスル。

第 35 表 季節別日本人結核死亡率

地 名	年 次	春 (%)	夏 (%)	秋 (%)	冬 (%)	
滿 洲	關 東 州 及 附 屬 地	昭 5 一 12 年	25.8	27.2	23.8	23.1
	大 連 市	昭 10 一 13 年	25.7	25.7	25.3	23.3
	南 滿 保 養 院	昭 8 一 14 年	28.5	28.0	24.3	19.2
日 本	全 國	昭 1 一 6 年	23.1	25.5	26.3	25.0
	警 視 廳 管 內	昭 3 一 13 年	28.1	30.1	14.2	27.6
	東 京 市 療 養 所	大 9 一 昭 12 年	24.5	25.6	26.7	23.2

之ニヨルト滿洲ニ於テハ夏若シクハ春ニ死亡率ガ稍々高イケレドモ、春、夏、秋ノ差ハアマリ大キクナイ。冬ハ著シク低イ。秋カラ冬ノ初ニ内地ヘ歸還スル患者ガ多イ爲デナイトカトモ考ヘラレルガ、保養院ノ如キ收容患者數ノ一定シテ居ル所デモ特ニ冬ノ死亡率ガ低イノデアアル。内地ノ季節別死亡率ト對照シテ見ルト、滿洲ト

大差ナク、唯警視廳管内即チ東京府ノ結核死亡率ハ夏ニ於テ著シク高イ。之ニ比較スルト滿洲ノ夏ノ死亡率ガ夫程デナイ事ハ、氣候ガ内地ノ夏ノ様ニ蒸暑クナイカラ良イト云フ事ヲ示スモノト思フ。同ジ東京ノ夏デモ市ノ療養所ノ死亡率ガ差程高クナイノハ、環境ガ良ク市内ヨリモ涼シクテ凌ギ良イ事ヲ示スノデアラウ。

第4節 結核性疾患發病ト季節ノ關係

肺結核ノ發病時期ヲ正シク知ル事ハ困難デアアルガ、岩本氏ガ新京滿鐵醫院ノ内科患者約4萬人中ノ結核性疾患(肋膜炎ヲ含ミテ總患者ノ17.8%)ニ就テ調査シタ處ニヨレバ、其發病時期ハ5、6、7、8月ガ最モ多ク、冬期ハ少イト云フ。

又西山氏ガ滿大内科入院患者(昭和2—11年滿10ケ年)ノ結核患者2746名(16歳以上)ノ發病期ニ就テノ調査ニヨレバ、肺結核ハ總患者數ニ對スル率ニ於テ2月ガ最高、次レカラ3、4、5、1、8月ノ順ニ下ル。

右兩統計ヲ綜合スルト、肺結核ノ發病ハ晩冬ト春夏ガ多イト云フ事ニナル。

札幌ノ有馬内科デノ調査デハ冬及春ニ多ク發病シ、臺灣醫院デハ内地人モ本島人モ3月カラ8月マデ發病率ガ上リ5月ガ最高デアル。

即チ肺結核ノ發病時期ニ就テハ滿洲ト北海道、臺灣等ノ間ニ大差ガ無イガ、滿洲ニ於テ晩冬ト春ノ發病ノ多イノハ寒氣ノ直接影響デナク、非衛生的ナル蝨居生活ノ結果ト見ルベキデアラウ。

次ニ肋膜炎ノ發病ト季節ノ關係、之ハ肺結核ニ比シテ其時期ヲ正確ニ知り得ル例ガ多イ。第36表ハ大部分西山氏ニ據ルガ、春、夏、秋、冬ニ換算シタモノデアル。

岩本氏ハ新京デ5、6、7月即チ晩春及初夏ニ多イト報告シ、大連市赤十字病院ノ外來統計デモヤハリ春ガ多ク、次ガ夏デアル。

第36表 季節別肋膜炎發病率

地名	病院名	春 (%)	夏 (%)	秋 (%)	冬 (%)
大連	大連醫院内科(入院)	32.8	24.7	19.4	23.1
	赤十字病院内科(外來)	33.1	27.8	23.7	15.4
奉天	滿大内科(入院)	30.5	25.9	23.2	20.4
同	同小兒科	23.5	27.2	26.1	23.2
東京	三浦・島菌内科(入院)	29.4	26.4	22.1	22.0
	同慶大小兒科	34.3	29.2	20.3	16.2
金澤	山田内科(入院)	36.5	16.9	18.4	28.2
新潟	澤田内科	28.6	30.5	23.1	18.0
札幌	有馬内科(入院)	29.2	22.1	20.7	28.0
臺灣	臺北醫院内科(内地人)	28.5	29.6	20.7	21.0
	同本島人	31.9	29.3	16.8	21.9

西山氏ノ滿大内科ノ調査デモ3、4、5、6月ニ多ク、3月ガ最高即チ春ガ多イ。

大連醫院内科デノ調査ハヤハリ3、4、5月即チ春ガ斷然多イ。

臺灣デハ内地人ノ肋膜炎ハ3月カラ9月マデガ高イ。本島人デモ3、5、6、7月ニ多ク、5月ガ最高デアル。

東京デモ三浦、島菌内科入院患者デ4、5、6月ニ多ク、最高ハ5月デアル。

金澤ノ山田内科入院患者デハ、2、3、4、5、6月ニ多ク、最高ハ3月、新潟ノ澤田内科デハ4、5、6、7、8、9月即チ春夏、殊ニ夏ガ多イ。

仙臺ノ熊谷内科デモ、3月カラ増シテ5、6、7月ニ最モ多イ。

小兒科ノ方デハ山岡氏ガ奉天醫大ノ小兒科デノ調査ニヨリ夏ニ最モ多ク發生シ、秋ガ之ニ次グト報告シテ居ル。

東京ノ慶應醫大ノ小兒科デハ、春ガ多ク夏ガ之ニ次グ。

之ヲ要スルニ肋膜炎ノ發病時期モ滿洲ト内地及臺灣ト大差ガナイ。唯奉天デ小兒肋膜炎ガ夏特

ニ多く發シタノハ偶然デアツタカ、或ハ意味ガアルカ、若シ有リトスレバ、夫レハ恐ラク滿洲ノ冬季ニ於テ初感染ヲ受ケル小兒ガ比較的多ク、夫レガ數ヶ月經タ夏ニ丁度肋膜炎ヲ發シ易イ時期ニ到達スルト言フ事ガ一ツノ原因デアラウ。ソシテ他ノ原因ハ滿洲ノ夏ハ特ニ日ガ永ク、從ツテ休養時間ガ乏シク、過勞ニ陥リ易ク、而カモ紫外線ガ強イカラ刺戟ガ過ギルト云フ様ナ事デハナカラウカト思フ。

兎ニ角、冬ノ寒サガ直接肋膜炎ヲ誘發スル様ナ事實ハ認メラレナイ。

吾々ノ保養院ニ入院中ニ濕性肋膜炎ヲ起シタ患者 37 例ニ就テ深川氏ガ季節別ニ分類シテ見タ處、ヤハリ冬季間ニ多發スルト云フ事實ハナイ。

次ニ腦膜炎ノ發病時期ニ就テ奉天ノ山岡氏ニヨレバ、内地ニ於テモ大體春、夏ニ高率デアツテ、其曲線ハ滿洲デモ似テ居ルガ、此春カラ夏ニカケテノ山ガ内地以上ニ高イトノ事デアル。同氏ハ自身奉天ニ於テノ 160 例ト大連醫院小兒科ニ於ケル吉富、松浦兩氏ノ 360 例ヲ合セ、520 例トシテ滿洲ヲ代表サセ、東京ノ慶應醫大島氏及濟生會乳兒院ノ大氣氏ノ例合計 406 例ヲ對照トシテ曲線ヲ作ツテ圖示シタ。而シテ山岡氏ハ滿洲ノ小兒ノ結核性腦膜炎ガ特ニ春、夏ニ高率デアル事ノ理由トシテ、冬季ノ蟄居生活ニヨル所謂紫外線暗黒期カラ春季ニ於テ俄カニ大量ノ紫外線ヲ受ケル様ニナル事ガ、確カニ結核感染者ノ免疫不安定状態ニアル兒童ニ對シテ、發病ヲ促ス事ガ考ヘラレルト説イテ居ル。之ハ正シイ考ヘ方デアラウト思フ。

第 5 節 咯血ト季節ノ關係

先ヅ内地ニ於ケル關係ヲ調べルト、鈴木左内氏ノ東京市療養所ニ於ケル調査ニヨルト、咯血ハ 3 月カラ 6 月ニカケテ多イ。

原氏ハ關西地方ニ於テ 4 月下旬カラ 6 月ニ互リ咯血ガ多イト報告シ、松田氏ハ 6、7、5、8、9、4、10、11、12、1、2、3 月ノ順ニ少クナルト云フ。

咯血死ニ就テハ刀根山療養所ノ河端、西村兩氏ニヨレバ、夏カラ秋ニカケテ最モ多ク、冬期ハ少イト云フ事デアル。

然ルニ滿大ノ西山氏ノ報告ニヨルト、咯血ハ内地ト異リ、奉天デハ冬最モ多ク、夏、春ガ之ニ次グト云フ事デアル。而シテ滿洲ニ於ケル冬季ノ生活様式ノ非衛生的ナルニ基因スルデアラウト述ベテ居ル。

一方吾々ノ保養院ニ於ケル 6 年間 425 例ノ咯血患者(血痰ヲ含ム、始發出血患者)ノ統計ヲ草場氏ガ取ツタ處ニヨルト、季節的ニ大キナ差ガ無く、春ガ稍々多イノデアル。即チ春ガ 26.3%、夏ガ 24.1%、秋モ 24.1%、冬ガ 25.5%デアツタ。而シテ咯血死ハ春及初夏ニ多ク、冬ニ非常ニ少イ。

ソコデ内地ニ於テハ一般ニ春咯血ガ多ク、冬ハ少イノニ奉天ニ於テ冬ノ咯血ガ多イト云フノハ、冬季ニ於テ内地ノ春ノ如キ溫暖ノ生活ヲスル故ニ、内地ノ春同様ニ咯血ガ多ク來ルノデハアルマイカ、之ニ反シテ保養院ニ於テ冬特ニ咯血ガ多クナイノハ、開放主義ノ低溫生活ヲスル爲カト思ハル。

即チ同ジ滿洲デモ開放主義ヲ實行スルトセヌトデ咯血ノ起リ工合モ異ルノデハアルマイカ、今滿洲ニハ小平島ノ外 6 ヶ所ノ保養院ガ有ルノデアラカラ、今後更ニ多數ノ統計的調査ニヨリ此關係ガ闡明サレル事ヲ興味ヲ以テ期待スル次第デアル。

猶序ナガラ、咯血ハ青壯年ニ特ニ多ク、殊ニ男子ニ於テ著明デアル事ハ保養院ノ統計デモ事實デアル。

第5章 滿洲ニ於ケル結核蔓延ノ理由

第1節 傳染源ノ考察

滿洲ニ於ケル「ツベルクリン」反應ノ檢索ニヨリ、滿人、蒙古人、朝鮮人、白系露人等概シテ陽性率ガ高イノデアアルガ、日本人ニ於テハ内地ニ比シテ寧ロ低イ。然ルニ發病率乃至死亡率ガ高イノヲ見ルト、抵抗力ヲ弱ラセテ惡化サス因子ガ内地以上ニ多イ事モ考ヘラレルガ、又一方ニハ同ジ感染數デモ濃厚感染ノ例ガ多イ事モ考ヘラレル。

此濃厚感染ノ可能性ニ就テハ建築様式、生活様式カラ容易ニ理解サレル所デアアル。即チ内地ノ木造日本式家屋ハ換氣ト直射日光ノ射入ガ良ク且ツ塵埃ヲ掃キ出スニ便利デアアルノニ反シ、滿洲ノ家屋ハ換氣ガ非常ニ惡ク且ツ日本式ノ掃除法デハ塵埃即チ病原菌ヲ含ム物質ノ除去ニ困難デアリ、二重ノ硝子窓デアアル爲紫外線ノ殺菌ガ殆ンド働カヌノデアアル。

斯様ナ對菌衛生上ノ不利ハ四季ヲ通ジテノ事デアアルガ、冬季ニ於テ殊ニ甚ダシイ。

此事ハ冬季ニ於ケル「ツベルクリン」反應陽性轉化率ノ高イ事實ニヨツテモ首肯サレル。實際滿洲ニ於テハ相當上流ノ家庭ニ於テモ一家ニ多數ノ結核患者ヲ發生シ、而カモ濃厚傳染ト思ヘル惡性結核例ヲ屢々見ルノデアアル。

猶吾々ハ臨牀家トシテ屢々遭遇スルノデアアルガ、内地カラ結核患者ガ夫レト知ラズニ渡滿シテ結核菌ヲ撒布シ、新患者ヲ作ル顯著ナ實例ガアル。

例ヘバ内地カラ無自覺性ノ結核患者ガ職ヲ求メテ渡滿シ、親戚知己ノ許ニ滞在シ、其間ニ其家ノ子供全部ニ感染セシメタ様ナ例ガ少クナイ。一面ニハ喀痰ヲ路面或ハ汽車、電車等ノ待合所、「プラツトフォーム」、映畫館等否寢室ノ床ニスラ喀出スル習慣アル非衛生の民族モ多イ事ヲ考フルトキ、傳染源ハ相當ニ多イモノト見ネバナ

ラヌ。

夫故結核未感染ノ若イ人々ガ渡滿スルト間モナク感染シテ初期浸潤或ハ肺門淋巴腺結核等ヲ起シ、或ハ肋膜炎ヲ起シナドスル。之ハ内地デ田舎ノ者ガ東京ヤ大阪ヘ出ル時ト同等以上デアラウ。從來渡滿後1—2年以内ニ結核性疾患ヲ起ス者ガ多イト云ハレタガ、之ハ單ニ滿洲ノ氣候風土ヤ仕事ニ慣レヌ間ガ危險ダト云フ意味ダケデナク、此初感染ト云フ事モ重大ナ意味ヲ持つモノト考ヘル。

第2節 發病動機ノ考察

今更云フ迄モナク、結核ハ唯結核菌ノ侵入ノミデ起ルモノデナク、發病ヲ餘儀ナクスル動機或ハ體質ノ弱點ガアツテ成立スル。之ハ内地デモ外國デモ同様デアアルガ、滿洲ニ於テ此發病誘因ガ特ニ多イ様ニ考ヘラレル。

一體内地カラ渡滿スルト云フ事夫レ自身ガ相當ナ境遇ノ變化デ、心身ノ過勞トナル。渡滿スル爲ニ其準備、暇乞、送別會等ニヨリ非常ニ疲勞スル。ソシテ旅行疲レヤ新生活ノ爲ノ過勞ニヨリ、愈々從來ノ潛伏結核ヲ發動セシムルコトモ有リ勝デアアル。滿大ノ山中太郎氏ノ統計ニ見ルモ、渡滿後2ヶ月以内ノ發病例ガ184名ノ患者中ニ4名アツタ。最近自分ノ見タ1例ノ如キモ渡滿前ニ極度ニ疲勞シ、神戸乗船ノ際ニ血痰ヲ出シ、大連上陸ノ翌日歡迎會ニ招カレタ後ニ喀血シタノデアアル。

渡滿匆々ノ健康診斷デ往々發見セラル、活動性結核ノ中ニハ、内地ニ於テ既ニ活動性デアツタガ、無自覺性ニ經過シタモノト、内地デハ非活動性デアツタノガ渡滿ト云フ行動ニヨツテ活動性ニ進展シタモノトアル。

又滿洲ニハ勤勞者ガ多イガ、内地ノ大等ニ比シテ勤務上ノ變動ガ多く、慣レザル土地ニ出張或ハ轉勤シ、慣レザル業務ニ忙殺サレル事モ多

ク、且ツ慰安ニ乏シイ植民地生活カラ不健全ナル享樂の放縱生活ニ走り、體力消耗ニヨツテ抵抗力ヲ減弱セシメ、終ニ發病ヲ餘儀ナクサレル例モ少クナイ。

又緯度ノ關係上夏ノ日ガ内地以上ニ永ク、日出ガ早ク日没ガ非常ニ遅ク、勢ヒ夜ノ休養時間ガ短縮サレテ過勞ニ陥リ勝デアル。此弊ハ日滿時差撤廢ニヨツテ一層甚ダシクナツタノデアアル。又滿洲ニハ攝生ニ意ヲ用ヒズ、病氣ノ際モ容易ニ靜養セヌ様ナ豪傑風ノ人が比較的多イ事モ考ヘラレル。

然シ在滿邦人ノ抵抗力ヲ弱カラシメル共通ノ大弊害ハ何ト云ツテモ、其日常生活ノ缺陷デアアル。夫レハ一言ニシテ云ヘバ高温蟄居生活デアアル。

私ガ渡滿シタ今カラ 10 年前頃ノ實際ヲ見ルト、滿洲生活ノ第一要件ハ住居ヲ温暖ニスルコトデアルト云フ觀念ノ下ニ、窓ヲ開ク事ハ殆ンドナク、欄間ハ有ツテモ夫レハ單ニ採光ノ爲デアラカラ、釘ヅケテ所謂嵌メ殺シデアツタ。從ツテ住宅デモ役所デモ、會社デモ學校デモ寄宿舎デモ、換氣ト云フ事ハ殆ンド閉却サレテ居ツタ。例ヘバ學校ナドデモ炭酸瓦斯量ガ往々 3—4 %ニ上リ朝ノ始業時刻前ノ検査デスラ既ニ 1 %以上即チ生理的忍限量ヲ超エテ居ツタト云フ様ナ事實ガ、尾崎氏ノ報告ニモアル。學校デスラ然リ、一般ノ家庭ガ概シテ換氣不良デアツタ事ハ想像ニ難クナイ。而カモ春、夏ノ如キ高温ノ室ノ汚濁シ切ツタ空氣ノ中デ夜ヲ徹シテ麻雀ナドニ耽ル人モ少クナイノデアラカラ、結核ノ發病シ易イ事ハ當然デアアル。室温攝氏 20 度ハ珍ラシク無ク、25—30 度、時ニ 30 度以上ノ室サヘアツタノデアアル。

斯ノ如キ生活ハ結核患者ノ「サナトリウム」療法ノ正反對デアラカラ、結核ノ發病ヲ促シ、且又一度發病スレバ病勢惡化ノ一途ヲ辿ル事ハ當然デアアル。

猶洋式建築内ノ疊生活モ亦不合理デアアル事言ヲ俟タナイ。

斯クノ如ク住居ノ衛生ニ多クノ缺陷ガアル上ニ、多クノ在滿邦人ハ戶外ニ出ル事ヲ嫌フ傾向ガ強く、爲ニ大氣ト日光ノ恩惠ニ甚ダシク遠ザカル事ハ免レナイ。

猶又滿洲ニ於テハ冬季カラ春季ニカケテ野菜ガ乏シク、高價トナル關係上、其攝取量ガ自然少ク、而カモ從來白米食ヲ普通ノ主食物トシテ居ツタ爲ニ「ヴィタミン」類及ビ無機鹽類ガ缺乏シ易ク、結核發病ヲ容易ナラシメル體質ヲ構成シタ事モ考ヘラレル。

要スルニ滿洲ニ於ケル邦人ノ生活ハ結核ノ濃厚傳染ノ機會ガ多く、而カモ發病動機乃至病勢惡化ノ動機ガ多イノデアアル。

然シナガラ是等ハ皆、人々ノ理解ト努力ニヨリ改善シ得ル見込ガ充分ニアル。否現ニ著々理解サレ、實生活上ニ具現サレル傾向ガ見ラレルノデアアル。

猶一言シタイ事ハ、滿人が日本人ヨリモ感染率ガ高イノニ、日本人ヨリ結核患者乃至死亡者ガ少イ事デアアル。夫レハ何故カト云フニ簡單ニ答フレバ滿人ノ方ガ抵抗力ガ強イノデアルト云ヘルト思フガ、然ラバ何故ニ抵抗力ガ強イカト云フニ、大約 5 箇條ノ理由ガアルト思フ。

第 1 ニハ滿人ハ自然淘汰ニヨツテ民族的ニ弱體質者ガ少ク、且又箇體的ニモ弱體質者ハ小兒期ニ於テ死滅シ、強體質ガ多く殘ツテ居ルコト。

第 2 ニハ滿人ノ方ガ萬事ニ吞氣デアラカラ、日本人ヨリハ概シテ休養ヲ多く取り神身ノ過勞ガ少イ。

第 3 ニハ滿人ノ方ガ日本人ヨリモ戶外ノ大氣、日光ノ恩惠ヲ受ケル機會ガ多イ。

第 4 ニハ青年ノ放縱生活ニ對スル社會的制裁ガ滿人ノ方ガ日本人ヨリモ強イ(例ヘバ泥酔狀態ヲ他人ニ見ラレバ結婚スル者ガナイト云ハレル)。

第 5 ニハ滿人ノ食物ハ榮養學上概シテ日本人ヨリモ合理的デアアル。即チ日本人ハ主食トシテ白米ニ執著シ、滿人ノ如ク高粱、粟、包米(玉蜀黍)、小麥粉、綠豆等ノ雜穀類ヲ殆ンド用ヒズ、動

物性食品ヲ攝ル場合モ其肉ノミヲ偏重シテ臟物等ヲ食スル者ガ少イ。又日本人ハ脂肪分ヲ滿人程多ク用ヒナイ。滿人ガ生野菜ヲ多ク食シ、又

ハ油ヲ以テイタメテ食スルコトノ多イノモ「ビタミン」、無機鹽類及ヒ脂肪ヲ充分ニ攝取シ得ル點ニ於テ有利デアル。

第 6 章 滿洲ニ於ケル結核治療

第 1 節 大連ニ於ケル大氣療法

結核ノ大氣療法ハ日本内地ニ於テモ嘗テハ相當危惧サレ、或ハ非難サレタ事スラアル、マシテ滿洲ニ於テハ、一般人ノ生活ガ溫暖第一主義デアツタ關係上、開放主義ノ療法ハ大體不可能視サレタ様デアルガ、今カラ 10 年前、滿鐵ガ今上天皇御即位奉祝ノ記念事業トシテ、社員及ビ一般人ノ爲ニ、結核療養所ヲ設置スル事ヲ決定シ、不肖ニ其創立ニ關スル事務ヲ命ゼラレタ時、自分ハ時ノ衛生課長金井章次氏ト共ニ、大連市郊外小平島會ニ地ヲトシ、ソシテ開放主義ノ療法ガ實行出來ルト云フ主張ノ下ニ、病室南側ハ一杯ニ窓ヲ作り、ソノ上ニ大キナ廻轉欄間ヲ設ケナドシタノデアル。

同時ニ滿洲ノ結核豫防上最モ緊要ナル事項トシテ、日常生活ノ様式ヲ改善スル事、就中戶外生活ヲ獎勵シ、高温密閉主義ヲ清算シテ換氣ヲ良クスル事、其具體的方法トシテ欄間ヲ廻轉式ニ改メル事等ヲ自ラ實行シツツ提唱シタノデアル。

而シテ昭和 7 年 5 月 25 日ニソノ療養所即チ南滿洲保養院ガ竣工シ、開院式ヲ舉ゲテ以來、徹底的ニ開放主義ヲ實行シテ今日ニ至ツテ居ル。即チ晝夜共窓ヲ開放シ、只強風ノ時ノミ閉スガ、寒中ノ夜戶外ガ零下 18 度ニ達シタ時ト雖モ、欄間マデ閉ス事ハナイ。

暖房ノ蒸汽ハ通スガ、之トテモ診察ノ時ヤ食事ノ時ナドニ風ヲ引カセヌコトヲ主眼トスルノデアルカラ、絶エズ通氣スルノデハナイ。

從ツテ室温零下 5 度稀ニ 10 度ニ下ツタコトモアル。昨年 12 月 1 日カラ今年 2 月末日迄ノ 3 ヲ月間ニ、病室ニ 10 時間以上通氣シタ日ハ 37 日、

24 時間連續通氣シタ日ハ僅カニ 6 日ノミデアル。之ニヨツテ大體室ノ寒サ程度ガ想像出來ルト思フガ、寒冷ト云フ事デ、患者側カラ不平ノ出タコトハナイ。皆開放生活ヲ喜ンデ居ル。石炭不足ヲ告ゲテ通氣出來ズ、開放シタ儘デハ暖房放熱器ノ破裂スル恐レノアル寒夜ナド、止ムヲ得ズ窓ヲ閉シタコトガアルガ、之スラ患者側デ非難スル程ニ、患者ノ寒氣ヲ恐レズ開放ヲ好ムノデアル。

參考ノ爲吾々ノ保養院ノ患者ノ轉歸別統計表ヲ茲ニ掲ゲル。

第 37 表 南滿洲保養院退院者轉歸別 (昭和 7—14 年度)

	實 數	%
勤 勞 可 能	744	35.0
輕 快	759	35.7
不 變	364	17.1
增 惡	32	1.6
死 亡	226	10.6
計	2125	100.0

收容スル患者ノ病勢ハ入院直後ノ檢査ニ於テ結核菌陽性者ガ $\frac{1}{3}$ ヲ占メル程度デアリ、病期分類デハ $\frac{1}{3}$ 以上ヲ第 III 期ガ占メルト云フ程度デ、必ズシモ輕症者ノミデナイ。而シテ平均在院日數ハ約 6 ヲ月半デアル。

斯様ニシテ大連地方ニ於テ結核療養ガ出來ルノミナラズ、徹底的ノ大氣療法モ安心シテ實行シ得ルコトガ立證サレタノデアル。

猶結核デハナイガ、肺炎ノ小兒ノ治療ニモ、開窓療法ガ有效デアツテ、死亡率ヲ減退セシメタト云フ經驗ヲ、大連病院小兒科ノ太田正氏が報告シテ居ル。同小兒科デハ、冬季モ晝夜開窓シ、室温零下 7 度マデ下ツタコトモアルト云フ。

吾々ノ保養院ニ於ケル他ノ治療法ニ就テハ省略スルガ、人工氣胸療法ハ現在ノ患者ノ 23%ニ施行シテ居ル。

第 2 節 他地方殊ニ北滿ニ於ケル 大氣療法

滿洲帝國ノ建國以來、邦人ノ渡滿者ガ著シク増加シ、奥地ヘノ進出モ目覺シイノニ對シ、療養所ガ南端ノ大連ニ 1 箇所ヨリナイノハ宜シクナイ。ドウシテモ北部ニモ、各大都市ノ附帶施設トシテ其郊外ニ建ツベキデアルトノ見地カラ、自分等ノ保養院ノ増築案ヲ差控ヘテ、北部都市ヘノ建設ヲ念願シタノデアアルガ、滿鐵ハ先ヅ舊北鐵ノ富拉爾基療養院ヲ改修シテ昭和 13 年ニ之ヲ開院シ、次デ滿鐵創業 30 週年記念事業ノ一トシテ大連、奉天、新京、撫順、哈爾濱ノ 5 ヶ所ニ保養院ヲ新設シ、昭和 14 年 3 月末マデニ全部開院シ、現在合計 7 ヶ所「ベッド」數 670 牀トナツタノデアアル。

大連以外ノ北部地方ノ保養院ニ於テモ、冬季モ窓ノ一部ヲ開放シ、夜間ト雖モ欄間丈ケハ開放シテ過スノデアアルガ、患者ハ皆安心シ且ツ満足シテ療養ヲ續ケルノデアアル。

今富拉爾基保養院ニ於ケル日置氏等ガ實施シタ冬季大氣療法ヲ紹介スル。即チ同院デハ戶外臥堂氣溫零下 32 度ニ達シタコトモアルガ、斯ル時ニモ一部ノ患者ハ其臥堂ニ居ラセ、他ノ一部ノ患者ハ室内ニ於テ廻轉窓ヤ、小窓ヲ開放シテ大氣療法ヲ實行シ、好成績ヲ收メタノデアアル。勿論防寒ノ服裝ニハ考慮ヲ拂ヒ、湯「タンボ」ヲモ使用シタノデアアル。

猶普通病院デモ、近年大氣療法ガ勇敢ニ行ハレ出シタ。例ヘバ新京醫院ノ内科デ徳山氏ハ零下 30 度以下ニ降ル時ニモ開放療法ヲ行ツタ。尤モ暖房ヲシツツ、零下 7 度マデ下ツタコトガアル。窓ニ「ガーゼ」ヲ張ツテ置ケバ、室溫ガ 10—15 度ニ保タレルガ、空氣ハ幾分汚染サレ、炭酸瓦斯ガ 0.55%ニ上ツタト云フ。

又札蘭屯ノ仙波氏等ノ報告ガアル。即チ氣溫零下 30 度ノ時モ、南向キ病室ノ小窓ヲ開キ、木綿布一枚張ツテ置イタ。其時枕頭 (+) 14 度、牀上ハ零度乃至 (+) 10 度デアツタト云フ。

斯様ニ北滿ニ於ケル一般病院ニ於テモ大氣療法ガ相當ノ程度マデ實行セラル、ニ至ツタノデアアル。

次ニ滿鐵經營ノ 7 保養院ニ於ケル極寒期新入院者ガ突然寒冷ナ病室ニ收容サレルコトガ、何等カ惡影響ヲ與ヘルカ、何カ不快ノ症狀ヲ起スカ患者自身ニ如何ナル感想ヲ與ヘルカト云フコトヲ調査シタ處、次表ノ如ク 106 人中 1 人トシテ不快ヲ訴ヘタ者ナク、皆爽快ダト云ヒ、其中ノ 29 名即チ約 3 割ハ特ニ非常ニ爽快ト云ヒ、開放主義禮讚ノ辭ヲ書イタ者モ少クナイ。

此調査ニ加ツタ患者ニ入院後間ノナイ者モ少クナカッタガ、夫レデモ盜汗ヤ頭痛ガ減少シタト

第 38 表 嚴寒期新入院者ノ大氣療法ニ對スル氣分

(昭和 14 年 12 月及昭和 15 年 1 月入院者)

保養院名	外氣最低溫	病室溫度	嚴寒期新入院者數	非常ニ爽快	爽快	合計
南滿(大連)	-17	-4~+10	34	13	21	34
同東分院(同)	-17	-3~+10	18	2	16	18
奉天	-27	-7~+5	8	0	8	8
撫順	-30	-10~+10	10	1	9	10
新京	-30	-3~+15	26	8	18	26
哈爾濱	-35	-3~+10	6	3	3	6
富拉爾基	-36	—	4	2	2	4
合計	—	—	106	29	77	106
備考	入院ノ初 1—2 日間寒冷ヲ訴フル者アルモ、皆速カニ慣レテ爽快ヲ覺エ窓ヲ閉ヂルヲ厭フニ至ル					
	入院前盜汗アリシ者 46 名、其後速カニ消失又ハ減少 41 名(89.1%)					
	入院前頭痛アリシ者 31 名、其後速カニ消失又ハ減少 22 名(71.0%)					
入院前ニ比シ食欲ノ増進セル者 52 名(50.0%)						

カ、消失シタトカ、食慾ガ増進シタト云フ者が相當アツタ。
猶此調査ニ於テ興味ヲ感じタコトハ保養院入院前、自宅又ハ他ノ醫院或ハ寮等ニ於テ、既ニ大氣療法主義ヲ實行シテ居ツタ者がカナリ有ルト

云フコトデアル。又モウツ面白イコトハ欄間ノ開キ得ル室ニ住ンダ者モ相當ニ有リ、而カモ夫レハ大連ノミデナク、北部地方ニモ有ルト云フコトガ明瞭ニナツタコトデアル。

第39表 保養院入院前生活狀況

保養院名	嚴新 寒入 期院	自 宅				寮 又 ハ 旅 館				他 病 院			
		欄 間 有	大 氣 生 活	非 生 大 氣 活	中 間	欄 間 有	大 氣 生 活	非 生 大 氣 活	中 間	欄 間 有	大 氣 生 活	非 生 大 氣 活	中 間
南滿(大連)	34	14	8	6	8	0	0	0	0	4	1	4	7
同東分院(同)	18	5	3	6	1	3	2	2	0	1	0	3	1
奉 天	8	0	0	4	0	0	0	0	0	3	1	3	0
撫 順	10	1	1	3	0	1	1	2	0	0	0	2	1
新 京	26	7	3	7	3	2	0	7	2	1	0	4	0
哈 爾 濱	6	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	1	1
富 拉 爾 基	4	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	1	1
合 計	106	27	15	30	12	6	4	11	3	9	2	18	11

即チ嚴寒時新入院者總數106名中入院前モ大氣生活ヲ實行セル者が21名アリ、其中自宅療養者15名、寮又ハ旅館ニ於テノ者が4名、他ノ病院ニ於テノガ2名デアツタ。
又入院前ノ住居ニ開キ得ル欄間ノ有ツタモノガ42名即チ39.6%アツタノデアル。

住宅又ハ學校、寄宿舎、各種事務室等ニ、欄間ヲ開キ得ル様ニスルコトハマダ充分ニ普及セヌケレドモ、夫レデモ既ニ哈爾濱、佳木斯等ニモ目撃サレルニ至ツタノデアツテ、之ヲ10年前ノ事實ニ比較スルト實ニ著シイ變化ト云ハネバナラヌ。

第7章 滿洲ノ結核對策

以上述べ來ツタ處ニヨリ、滿洲ノ結核對策 ハ自ラ明瞭デアル、今一括シテ表ニ示ス。

第40表 滿洲ノ結核對策

1) 生活様式改善

1. 密閉主義排撃、換氣勵行(廻轉欄間ノ普及)
2. 高溫生活排撃、冬季室温18度以下ノ提唱
3. 室内塵埃除去ノ勵行
4. 戶外生活ノ獎勵
5. 寒氣ニ對スル鍛鍊
6. 榮養ノ改善(白米全廢、雜穀併用、生野菜多用等)
7. 過勞防止、休養充足
8. 體育ノ合理化
9. 轉居前家屋ノ消毒
10. 喀痰ノ取締勵行
11. 映畫館ノ取締リ(消毒、乳兒入場禁止等)
12. 享樂生活ニ對スル國策的肅正(法規的取締及社會的制裁)

II) 健康診断ノ勵行(健康相談所ノ増設)

開拓民諸官廳、會社採用者等ニ對シテハ成ルベク渡滿前ニ施行ノコト

1. 「ツベルクリン」反應
2. 陽性者ノ精密検査(「レントゲン」、血沈、喀痰検査等)

III) BCG 接種(「ツ」反應陰性者ニ)

IV) 「ツ」反應陽轉者ノ監視、保護

V) 要治療者ノ早期療養(療養所ノ増設)

VI) 結核性兒童ノ療養學園

VII) 結核豫防知識普及(社會教育) 開拓民ヲ始メ新渡滿者ニ對シテ特ニ考慮ヲ要ス

VIII) 結核撲滅對策推進機關

而シテ特ニ強調シタイ事ハ

- 1) 内地カラ活動性結核患者ヲ輸入セヌコト
- 2) 滿洲デ發病シタ患者ハ早期ニ滿洲ニ於テ治療スルコト

即チ日滿兩國間ニ結核不可侵方針ヲ取ルコトガ必要デアル。

從ツテ各大會社、官廳等ハ従事員採用ニ當ツテ結核ヲ中心トスル精密検査ヲ行ヒ、體格ヲ嚴選シ、採用後ハ屢々健康診断ヲナシツ、健康監理ヲ行フベキデアル。其爲ニ大會社等ハ健康診断ノ機關ヲ獨自ニ設置シ、進ンデ療養機關ヲモ持ツコトガ望マシイノデアルガ、漸次其機運ガ滿鐵以外ニモ動キツ、アルコトハ喜ビニ堪ヘヌ次第デアル。

開拓民ノ健康診断ハ勿論内地ニ於テ嚴重ニ行ヒ、苟モ活動性結核アル者ハ渡滿セシメズ、

「ツ」反應陰性ノ青少年ハ BCG 接種後ニ渡滿サセルト云フ方針ヲ今後モ必ズ勵行シタイモノデアル。從來青少年義勇隊以外ノ開拓民ニ對シテハ健康診断ガ届カナカツタ恨ミガアル。今後ハ全家族ニ對シテ渡滿前ニ施行スルコトガ望マシイ。

猶渡滿後ノ生活ニ對スル正シキ知識ヲ入滿一步前ニ於テ注入スルコトガ必要デアル。夫ハ内原ノ青少年義勇隊ハ勿論、其他ノ開拓民ニ對シテモ、船内等ニ於テ讀マシムル滿洲生活ノ栞トモ云フベキモノヲ與ヘルヲ可トス。

「ツベルクリン」陰性者ニ BCG 接種ヲ行フコトハ、自分等ノ經驗デハ局所ノ化膿モ見ズ、且ツ陽性轉化モ相當ニ起リ、何等ノ弊害モ認メラレヌカラ勵行シタ方ガヨイト考ヘルモノデアル。

結 語

滿洲ハ從來結核ガ多カツタトハ云ヘ、之ハ氣候風土ニヨル當然ノ結果ト云フノデナク、充分改善ノ餘地ノアル事デアリ、其從來ノ缺陷モ既ニ判明シ、其對策モ決定シテ居ル事デアルカラ、今後官民共ニ結核撲滅ニ向ツテ誠意ト熱意ヲ以テ進ミサヘスレバ、年ト共ニ撲滅ノ實ヲ舉ゲ得ルト確信スルモノデアル。否既ニ其曙光ハ見エテ居ルト思フ。

但シ滿洲ノ結核患者ハ成ルベク滿洲デ療養スル方ガヨイト云フ事ガ一般ニ理解サレ來リ、且又入院スベキ機關モ漸次増加スルニ從ヒ、内地歸還者ノ率ガ減ジツ、アル故、當分ハ滿洲ノ結核

死亡率ノ數字ハ猶幾ラカ増加スルカモ知レヌ。又人口増加ニ伴モ、死亡者ノ絕對數ハ増スデアラウ、卒然ト其數字ダケ見レバ、結核撲滅ニ對スル之マデノ努力ハ何等效果ガナカツタ様ニ感ズルカモ知レヌガ、夫レハ正シイ見方デナイ事ヲ世人ガ豫メ理解サレル様望ムモノデアル。今後モ撲滅事業ノ手ヲ緩メズ、更ニ一段努力スルナラバ、近キ將來ニ於テ結核死亡率ハ必ズ峠ヲ下リ始メルモノト確信スル。

斯クテ「滿洲ハ健康ノ樂園デアル」ト誰モガ云フ時代ノ來ルノヲ待望シテ止マヌ次第デアル。

(附記) 本報告ノ準備ニ對シテ、滿洲ノミナラズ

内地、朝鮮、臺灣等ノ研究家各位カラ、種々有益ナル論文又ハ未發表資料ヲスラ御惠與賜リ、又南滿洲保養院ノ同僚及ビ他保養院ノ院

長始メ醫局諸兄ガ熱心ニ御援助下サツタノデ曲リナリニモ責ヲ塞グコトヲ得タ事ヲ、茲ニ特記シテ深甚ノ謝意ヲ表スル次第デアル。

主要文獻

1) 關東局人口動態統計、昭和12年迄。2) 大日本統計年鑑、昭和12年迄。3) 厚生省豫防局、結核豫防事業概要、昭和13年。4) 厚生省豫防局、結核死亡統計、昭和14年。5) 學術振興會、國民保健ニ關スル統計資料、昭和12年。6) 白十字會、日本結核事業總覽、昭和13年。7) 本間英史、滿洲ニ於ケル結核問題、日本公衆保健協會雜誌、昭和2年。8) 本間英史、滿洲ニ於ケル結核豫防ノ實行方策、滿洲文化協會、昭和11年。9) 岩田穰、共濟社員殊ニ鐵道従業員ノ肺結核統計の觀察、勞働衛生資料、大正15年。10) 戸田忠雄、滿洲ニ於ケル結核ト其豫防對策概要、滿洲醫學雜誌、25卷、昭和11年。11) 豐田太郎、滿洲ノ醫事衛生殊ニ傳染病、九大醫報特別號、昭和10年。12) 三浦運一、滿洲日本人死亡統計ノ衛生學的考察、滿洲醫學雜誌、5卷、大正15年及8卷、昭和3年。13) 三浦運一、換氣ト暖房竝ニ採光、學校衛生講演集、昭和9年。14) 三浦運一、保健上カラ見タ滿洲ノ住宅、保健問題十講、昭和8年。15) 三浦運一、滿洲ノ住居ト衛生、衛生工業協會雜誌、8卷、昭和9年。16) 三浦運一、滿洲開拓民ノ冬季保健生活指導要綱、臨牀大陸5號、昭和15年。17) 川人定男、最近ニ於ケル在滿日本内地人死亡統計ノ衛生學的考察、滿洲醫學雜誌、19卷、昭和8年。18) 川人定男、在滿邦人結核統計補遺、滿洲醫學雜誌、25卷、昭和11年。19) 川人定男、山田弘、1931-1935年在滿日本人死亡統計ノ研究、滿洲醫學雜誌、30卷、昭和14年。20) 遠藤繁清、滿洲ト結核、滿洲保健局問題十講、昭和8年。21) 遠藤繁清、滿洲ノ結核問題、學校衛生講演集、昭和9年。22) 遠藤繁清、結核ノ氣候療法、現代ノ診療、第3輯。23) 大連市役所衛生課、結核性呼吸器病ニヨル屍體火葬數調査、昭和15年。24) 小田俊郎、大田黑武三郎、臺灣ニ於ケル結核性內科疾患ノ研究、死亡統計ヨリ見タル肺結核、臺灣醫學雜誌、35-36卷。25) 小田俊郎、臺灣ニ於ケル結核ノ地理病理學的觀察、結核16卷、昭和13年。26) 曾田長宗、內臺生命表ノ比較ニ現ハレタ肺結核死亡ノ影響、社會事業ノ友、65號。27) 渡邊文雄、滿洲ニ於ケル結核ノ輾近ノ動向、臨牀大陸5-10號、昭和15年。28) 西山文雄、滿洲ニ於ケル結核性內科疾患ノ臨牀研究、臨牀大陸2-4號、昭和14年。29) 滿鐵衛生課、在滿邦人兒童生徒ノ結核ニ關スル調査、「ツベ

ルクリン」皮内反應成績、東京醫事雜誌、2953號、昭和12年。30) 飯尾純三、二木保男其他、關東州内日滿學校生徒3478名ノマンロー氏反應調査、滿洲醫學雜誌、26卷、昭和12年。31) 岩原拓、學校生徒兒童竝ニ教職員ノ結核罹患狀況概觀、學校衛生、昭和14年12月。32) 野津謙、井上房江、東京京橋區ニ於ケル學童結核豫防ニ就テ、結核、昭和13年。33) 貴嶋和定其他、大阪府下壯丁豫備檢診ニ於ケル「ツ」反應、赤血球沈降速度竝ニ結核性疾患ニ關スル成績、學校衛生、昭和15年1月。34) 遠藤繁清、小松雄吉、山田弘、大連市初等學校入學兒童結核調査、滿洲醫學雜誌、29卷、昭和13年。35) 山田弘、惣中康夫、大連市ニ於ケル學童生徒ノ結核ニ關スル研究、滿洲醫學雜誌、29卷、昭和15年。36) 在滿日本大使館教務部保健課、在滿邦人中等學校生徒ノ健康調査、學校衛生、昭和15年。37) 文部大臣官房體育課、師範學校生徒ノ死亡竝ニ疾病ニヨル退學、休學、缺席ニ關スル調査、學校衛生、昭和14年11月。38) 岩本茂樹、新京滿鐵醫院內科ニ於ケル結核患者ノ統計的觀察、滿洲醫學雜誌、29卷。39) 山中太郎、最近5ケ年間ニ於ケル入院患者ノ統計、滿洲醫學雜誌、29卷。40) 關東保健館、大連警察管内接客業者健康診斷成績、昭和14年。41) 廣木彥吉其他、蒙古人ニ施行セル「ツ」反應、東京醫事新誌、昭和12年。42) 廣木彥吉其他、滿人特種營業婦女子ニ實施セル「ツ」反應、東京醫事新誌、昭和12年。43) 廣木彥吉其他、滿人兒童生徒ニ施行セル「ツ」反應、東京醫事新誌、昭和11年。44) 太田健三、青少年ノ「ツベルクリン」反應ニ就テ、結核、17卷、昭和14年。45) 日置達雄、米田薰、太田稔、北滿ニ於ケル日滿小學兒童ニ施行セル「ツベルクリン」皮内反應成績、滿洲醫學雜誌、31卷、昭和14年。46) 奉天省警務廳、奉天市接客業者結核汚染狀態、滿洲醫學雜誌、31卷、昭和14年。47) 野見山重寬、樺島春男、鞍山ニ於ケル賣笑婦ニ實施セル「ツ」反應、東京醫事新誌、昭和12年。48) 箭頭正男、山中賢三、ハルビン市在住白系露人小學兒童ニ於ケル「ツベルクリン」反應成績、滿洲之醫界、昭和12年。49) 原隆一、壹岐幸藏其他、京城師範附屬小學校兒童ニ施行セル「ツベルクリン」反應實施成績、城大小兒科雜誌、10號、昭和12年。50) 原隆一其他、京城師範學校生徒ニ施行セル「ツベルクリン」反應成績、城大小兒科雜誌、10號、昭和

12年. 51) 成田夫介, 北村勝巳, 金行正夫, 青少年結核性肺炎患ノ内鮮別調査. 結核. 16卷. 昭和13年. 52) 鐵門大陸衛生研究會. 鐵驛訓練所疾病體力調査. 大陸衛生. 2號. 昭和14年. 53) 島根縣健康保險課, 松江市白瀉小學校結核調査. 醫海時報. 昭和15年. 54) 山岡義郎, 田中守也, 徐政聞, 滿洲ニ於ケル小兒結核ノ臨牀的研究. 滿洲醫誌. 23卷. 昭和10年. 55) 山岡義郎, 田中守也, 徐政聞, 滿洲ノ小兒結核ニ就テ. 臨牀大陸. 5號. 昭和15年. 56) 金井進, 清水寛, 學齡兒童ノ結核感染ニ關スル知見補遺. 結核. 昭和12年. 57) 赤塚京治, 奥野徹, 都市勤勞者ノ結核罹病狀態ニ就テ. 日本産業衛生協會會報. 94號. 昭和14年. 58) 稻田淳其他, 東京帝大學生ノ結核ニ關スル調査. 結核. 17卷. 59) 山本賢三, 會社從事員ノ結核罹病狀況及其對策ノ概要. 60) 北海道廳衛生課, 北海道小學校兒童結核檢診成績. 醫海時報. 昭和14年. 61) 坂本義政其他, 大阪市内中心部某小學校及幼稚園兒ニ於ケル結核集團檢診ニ就テ. 結核. 昭和14年. 62) 警視廳醫務課, 娼妓ニ於ケル「ツ」反應陽轉ト發病. 昭和15年. 63) 今村荒男, 肺結核ニ關スル集團檢診. 結核. 16卷. 昭和13年. 64) 今村荒男, 集團檢診ニ於ケル「ツベルクリン」反應. 日本醫事新報. 昭和12年12月. 65) 今村荒男, BCG 接種ニ就テ. 結核. 15卷. 昭和12年5月. 66) 山岡義郎, 滿洲ノ小兒結核ニ就テ. 臨牀大陸. 3-4號. 昭和14年. 67) 曾我幸夫, 名古屋市區吏員檢診成績. 結核. 17卷. 昭和14年. 68) 星圭, 宮城縣某甲村3000名ノ健康調査成績ニ就テ. 昭和14年. 69) 警視廳醫務課, 東京市内咯痰檢査成績. 70) 河端明, 肺結核患者ニ於ケル咯血死. 結核. 昭和14年. 71) 尾崎吉助, 教室ノ換氣ニ關スル研究. 滿洲醫誌. 13卷. 昭和5年. 72) 稻葉逸好, 滿洲兒童ノ體質. 滿洲保健問題十講. 昭和8年. 73) 柳野嚴, 滿洲ニ於ケル結核ニ就テ. 昭和12年12月講演. 74) 寺尾殿治, 健康相談所事業ノ實際. 人生ノ幸福. 昭和9年. 75) 東京市役所, 昭和12年東京市療養所年報. 76) 東京市京橋區役所, 京橋區市立小學校兒童身體檢査統計表. 昭和13年. 77) 合田肇, 札幌市結核死亡ニ關スル疫學的考察. 學校衛生. 昭和14年. 78) 梅谷秀雄, 寶來善次, BCG ノ人體接種. 結核. 昭和13年. 79) 原政

敏, 淺野均一, 相澤豐三, BCG ノ人體接種ニ就テ. 結核. 昭和14年. 80) 堂野前維摩郷其他, BCG ノ人體接種成績. 結核. 昭和14年. 81) 島本保, BCG ノ接種手技ニ關スル實驗的研究. 結核. 昭和14年. 82) 有馬英二其他, 「ツベルクリン」反應ト結核發病ノ關係. 結核. 昭和13年. 83) 日置達雄, 北滿富拉爾基保養院ニ於テ冬期極寒中實施セル肺結核ノ室内開放並ニ室外大氣浴療法ノ臨牀的觀察ニ就テ. 日本臨牀結核. 1卷. 昭和15年. 84) 仙波秀介, 北滿ニ於ケル冬期開放療法. 結核. 昭和14年. 85) 徳山康秀, 滿洲(新京)ノ嚴寒期ニ於ケル開放療法ノ經驗. 結核. 昭和14年. 86) 太田正, 寒地ニ於ケル小兒肺炎ノ開窓療法ニ就テ. 臨牀大陸. 6號. 昭和15年. 87) 正路倫之助, 滿洲ニ於ケル冬期ノ寒氣ニ對スル人體ノ適應力ニ就テ. 滿洲醫誌. 31卷. 昭和14年. 88) 久野寧, 人體手足ノ耐寒反應ノ鍛練ニ依ル増進. 滿洲醫誌. 31卷. 昭和14年. 89) 遠藤賢, 奉天ニ於ケル日光紫外線ニ就テ. 滿洲醫誌. 21卷. 昭和9年. 90) 遠藤賢, 赤澤琢三, 奉天ニ於ケル醫學的氣象學ノ研究. 滿洲醫誌. 21卷. 24卷. 91) 田中文信, 煤煙防止概況. 滿洲技術協會雜誌. 70號. 昭和10年. 92) 田中文信, 滿洲主要都市ニ於ケル煤塵量. 滿洲醫誌. 23卷. 昭和10年. 93) 田中文信, 武田守人, 大連市ニ於ケル煤塵ニ關スル調査. 滿洲醫誌. 昭和10年. 94) 石井磨, 結核豫防事業ノ實際的考察. 結核. 12卷. 昭和9年. 95) 廣木彦吉, 滿洲ニ於ケル各型結核菌ノ系統的研究. 滿洲醫誌. 23卷. 昭和10年. 96) 今村荒男, 「ツベルクリン」反應ニ就テ. 日本醫事新報. 第836號. 特別課題. 97) 戸田忠雄, 「ツベルクリン」反應ニ就テ. 日本醫事新報. 第836號. 特別課題. 98) 岡治道, 「ツベルクリン」反應ニ就テ. 日本醫事新報. 第836號. 特別課題. 99) 岡治道, 兒科領域ニ於ケル結核問題. 兒科診療. 2卷. 100) 岡治道, 結核豫防體系ト其手技. 廣鐵鐵道醫會講演. 昭和13年. 101) 佐々虎雄, 「レントゲン」像ヲ見ラレター時性浸潤ノ2例. 内外治療. 第8年. 102) 佐々虎雄, 一時性肺浸潤ニ就テ. 診斷ト治療. 第24卷. 103) 小松雄吉, 胸部「レントゲン」像ニ於ケル一時性陰影ニ就テ. 結核. 16卷. 昭和13年. 104) 鈴木左内, 肺結核患者ノ咯血ニ關スル統計. 結核. 4卷. 大正15年.